

Title	教会史料を通して見た張献忠の四川支配
Sub Title	Zhang Xian Zhong (張献忠)'s control of Sichuan (四川) Seen through Jesuit materials
Author	浅見, 雅一 (Asami, Masaichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.2/3 (1990. 7) ,p.49(219)- 91(261)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 教会史料を通して見た張献忠の四川支配

浅見雅一

## 一 はじめに

郭沫若氏が、一九四四年に明朝滅亡三百周年を記念して「甲申三百年祭」を発表されてから、中国では、いわゆる明末の農民反乱が積極的に評価される様になった。<sup>(1)</sup>氏は、従来烏合の衆と見做されていた反乱勢力の組織性や反封建性に着目されたのである。その後、この見解は中国共産党の方針に合致するとして、毛沢東の政治路線に取り入れられてもいる。この事も一因となり、中国の学界では長期間に亘って、この見解が基本的に踏襲されてきた。日本でも、いわゆる明末の農民反乱については古くから取り上げられているが、「甲申三百年祭」が発表されてからは徐々にその影響を受け始めている。<sup>(2)</sup>

当初、こうした反乱勢力に対する積極的評価は、大順

政権を樹立したとされる李自成を中心とするものに限られていた。しかし、李自成を中心とする反乱勢力の評価が上がるに従って、もうひとつの主要な反乱勢力であり、大西政権を樹立したとされる張献忠を中心とするものについても、積極的に評価される様になってきた。中国では、こうした動きは既に一九五〇年代から見られたことであるが、七〇年代後半にはその傾向が一層顕著になっていく。張献忠を中心とする反乱勢力についての専著が出版され始めたことによっても、それを知ることができる。<sup>(3)</sup>

張献忠の四川支配について、多くの研究に共通して見られる事柄のひとつに、従来「屠蜀」と呼ばれてきた四川における張献忠による大虐殺は、必ずしも史実を反映しているわけではないとする見解がある。元来、李自成

を中心とする反乱勢力に較べて、張献忠を中心とするそれには、不明な点が多い。その中でも、「屠蜀」は議論の中心となる問題である。なぜならば、これにより四川全土が壊滅状態となり、その後の四川の発展にも影響を与えたとされるからである。確かに、張献忠が後世の歴史家に悪意をもって書かれることはあり得ることであろうが、それにしても張献忠が虐殺を行なったという記録が極めて多いのに対し、李自成が同様の事を行なったとする記録がさして多くはないのは不自然である。四川において大虐殺を行なったのは清軍であり、これを糊塗するために後世の歴史家が張献忠の責任にしたとする見解もあるが、今湊良信氏も指摘されている様に、これだけでは清軍の「有罪」は証明できても張献忠の「無罪」は証明できない。

日本ではこの問題については、既に鈴木中正氏が取り上げられている。<sup>(6)</sup>氏は、『蜀記』の記述に基づいて考察され、不明な点が多いとしながらも、張献忠による大虐殺を史実としてとらえておられる。一方、山根幸夫氏は、近年の中国における学界の動向を踏まえたくうえで、階級闘争の激化が「屠蜀」という話に転化したのであろう、と推測されている。<sup>(7)</sup>しかし、こうした一見相反する見解

も、実は二者択一的な問題ではない。なぜならば、鈴木氏が無批判に依拠された『蜀記』は、必ずしも全面的に信用できる史料ではなく、同様に山根氏が依拠された『蜀碧』も、氏自らが述べておられる様に、必ずしも史実を反映しているわけではないからである。

張献忠を中心とする反乱勢力、特に四川支配の問題について、この様に見解が分かれる最大の理由は、同時代史料の欠如である。加えて、張献忠に関する史料の殆どが後代のものであるにも拘らず、史料系統が明らかにされていないため、<sup>(8)</sup>信憑性の高い史料が特定できない。

「屠蜀」という他の反乱勢力に関する史料には顕著には見られない虐殺の記録が夥しい量にのぼっていることも、この問題を一層複雑にしている。張献忠の四川支配に関する史料の多くは後代に書かれたものであるか、或いは史料系統が不明であるために、それらを基に論じることが慎重を要するのである。例えば、非常に纏った史料とされる『蜀碧』は、一世紀近くを経た乾隆七年（一七四二年）に、当事者ではない彭遵泗によって著されたものであるために、今日では史料価値を消極的に見る傾向が強い。<sup>(9)</sup>『蜀碧』では張献忠は、非常に残酷な人間とされ、反乱勢力には負の評価しか下されていない。これ

は清軍の四川における大虐殺を糊塗するためであると言われることが多いが、清軍が四川において大虐殺を行なったとする記録もまた実際には、殆どないのである。

近年の中国においては、一般的に言って張献忠を積極的に評価しようとする余り、観念が先行してしまい、事実関係の解明が疎かにされがちであった。張献忠を積極的に評価し得る記述のみをとらえ、それ以外の記事は同じ史料の中であっても「封建歴史家」の言葉であるとして排除してしまうなど、史料操作自体にも問題がある様に思われる。多くの史料を扱っていながら史料価値を根本から論じることができないために、史料操作は多くの場合、整合的と言うよりはむしろ縫合的でさえある。

中国側の史料のみについて言うならば、同時代史料の欠如は紛れもない事実である。しかし、張献忠が四川において大西政権を樹立する以前に、ルイス・ブリオ Luis Bulhio (Louis Buglio) とガブリエル・デ・マガリャンエス Gabriel de Magalhães の二人のイエズス会宣教師が、布教のために四川に来ていた。彼らは張献忠の許に仕え、その政権が崩壊する迄を張献忠と共に過ごしている。そのうちのひとり、マガリャンエスは張献忠の四川支配に関する極めて詳細な報告書を、大西政権の

崩壊直後にローマに書き送っている。現在、ローマ・イエズス会文書館に保存されているこの報告書は、この問題に関する最も詳細で史料系統の明らかな史料であると考えられる。そこで本稿では、張献忠の四川支配について、従来殆ど注目されていなかったこの報告書を中心に、考察していくことにする。

尚、引用史料中の（ ）は原註を、「」は引用者註を表わすものとする。

## 二 教会史料を中心とした史料系統

教会史料を用いて張献忠の四川支配について考察することは、従来全く行なわれていなかったわけではない。というのも、張献忠に関する記事は、教会史料を中心としたヨーロッパ側の文献にも、幾つか見られるからである<sup>(10)</sup>。

ジェイムズ・B・パーソンズ氏も、教会史料を用いてこの問題を考察したひとりである。氏はローマ・イエズス会文書館所蔵の、デューニン・スポット編『中国史資料』の記事内容に言及され、スポットが見たと思われる原文書『中国の有名な盗賊張献忠によって行なわれた暴政についての報告』は、既に失われたと見做されている。

(11) パーソンス氏が用いた『中国史資料』は未刊史料ではあるが、十八世紀初頭に編纂されたものである。従って、同時代史料とは言えない。スポットは原文書を見たものと思われるが、『中国史資料』はあくまでも編纂物である。しかも、パーソンス氏がガブリエル・デ・マガリャンエスの未刊の報告書として挙げたものは、カルロス・ゾンマーフォーゲルやロベルト・シュトライト等の書誌によれば、ポルトガル語版が一六五一年に刊行されているという。(12)

一六五四年刊のマルティノ・マルティニ『韃靼戦記』には、張献忠に関する比較的詳しい記述がある。(13) 中国各地から杭州へ送られて来た書簡や報告を纏めたこの書は、『中国史資料』よりも年代的には近く、同時代史料と見做すこともあるいはできるかもしれないが、やはり編纂物であり、二次史料であることを免れない。また、刊行物であるために、イエズス会にとって望ましくない事は記述されていない可能性もある。他に、アドリアン・グレロン(14)、アダム・シャル(15)、ダニエルロ・バルトリ等(16)も張献忠について触れてはいるが、いずれも断片的である。こうした事情に関しては、イエズス会中国年報も基本的に同じである。(17)

張献忠の四川支配について最も史料価値が高いと考えられるマガリャンエスの報告書は、一六四七年五月十八日付のもので、原題を『四川 Su chuen 省とキリスト教界が破壊され、失われたことについて』、そして、その地でルイス・ブリオとガブリエル・デ・マガリャンエスが囚われの身になったことについての報告』という。(18) ゾンマーフォーゲルやシュトライトの書誌に見えている様な刊本の存在は不明である。従って、マルティニやスポットが用いたのが原文書か刊本かを判断することはできない。マガリャンエスの報告書を最初に紹介したのは、ジョージ・H・ダン氏である。(19) しかし、氏は張献忠による四川支配の問題としては扱っておらず、内容にまで立ち入ってはいない。以後、この文書は全く取り上げられていない。

他方、中国語で書かれてはいるが、ヨーロッパ側の史料として数えることもできる特異なものに、『聖教入川記』がある。(20) これはフランス人のイエズス会宣教師グールドン F. M. J. Gourdon (中国名「古洛東」) が著したものである。その序には「十年余り前に私「グールドン」が上海に行った時、イエズス会のある神父が感慨深く一冊の抄本を私に示した。その中には、利類思及び安文思

の二人が四川において開教した状況が、非常に詳しく記載されていた。私は非常に喜び、思わず気持ちが高まるのを覚えた。そこで、私はまた、方々に他の事実を追求していった。本書に記載するものが、即ちそれである。」と記されている。<sup>(21)</sup> 利類思と安文思というのは、ルイス・

ブリオとガブリエル・デ・マガリャンエスの各々の中国名である。ここに言う「一冊の抄本」なるものは、恐らく前述の『中国の有名な盗賊張献忠によって行なわれた暴政についての報告』のことであろうと思われる。四川人民出版社版の「出版説明」では、今日それは既に失われてしまったとされている。『聖教入川記』はその本文中に、「利と安の二人の司祭が四川にいた時の事柄は、以上述べた通りである。以下、続けて四川省の布教活動について論じる。」と注釈が加えられているので、<sup>(22)</sup> 『聖教入川記』の内容は、前半部と後半部では成立の事情が異なっていることが推測される。この前半部は、部分的にマガリャンエスの報告書と一致しており、そこから未確認の刊本について、ある程度その内容が推測できる。即ち、『聖教入川記』の前半部は、『中国の有名な盗賊張献忠によって行なわれた暴政についての報告』のグールドンによる全訳か、或いは部分訳かのいずれかであろうと

考えられるのである。この訳は、ポルトガル語の原文から直接中国語に訳されたものか、或いは一度他の言語に翻訳されたうえでの重訳であるのかは判らない。今日の中国では、ただ『聖教入川記』の存在が知られているだけである。

『聖教入川記』は、張献忠の四川支配に関する史料として比較的広く知られており、しかも中国語で書かれていることもあって、中国の多くの研究者によって利用されてきたが、一次史料ではないという理由により、記事そのものを史実として扱うには限界があるとされてきた。そのうえ、多くの場合、その内容迄もが問題があるとされてきたのである。しかし、『聖教入川記』の基になった史料、即ち、グールドンが上海で見たという「一冊の抄本」、更にはその基になった原文書を見ることができれば、こうした問題は克服され得るものと考えられる。そして、マガリャンエスの報告書こそがその原文書なのである。しかも、この史料は中国側の史料とは史料系統が全く異なるために、清朝に対する非難や不都合な内容は記さない筈である等という、中国側の史料に対して往々にして投げられる批判は当たらないであろう。

同様に中国語で書かれているが、ヨーロッパ側の史料

と見做すことのできるものに、『安先生行述』がある<sup>(23)</sup>。これは、ルイス・ブリオとフェルディナンド・フェルビースト Ferdinand Verbiest によって、マガリャンエスの死後に書かれた伝説である。しかし、これは簡略に過ぎるうえ、四川布教に関する記事もない。

こうしたヨーロッパ側の史料に対し、中国側の史料は、任乃強氏によれば、地方志も含めると百種類以上にもぼるということである<sup>(24)</sup>。この内の幾つかは史料系統についても論じられてはいるが、史料価値の如何に拘らず未だにその存在が確認されていないものがある可能性も高い。謝国楨氏もその多くを紹介してはいるが、未見のものも多いという<sup>(25)</sup>。日本においては事情は更に悪く、組織的な史料蒐集が進んだ今日でも、謝国楨氏が紹介されたもの凡てを確認することすらできない。

しかし、そうした中にあっても、近年中国の学界でも注目されつつある『歐陽氏遺書』は、日本においても現在閲覧が可能である。著者の欧陽直は、『蜀碧』巻三によれば、成都の大慈寺における大虐殺の生き残りであり、「後に賊は四川の北に逃げ去る時、欧陽直を連行した。

賊が鳳凰山の戦いに敗れたので、欧陽直は賊の許より脱出して、丹稜に流寓し、私〔彭遵泗〕の大叔父と姻戚関

係になった。欧陽直が著した『紀乱』の一書は、張獻忠の非常に詳しい事蹟を載せるが、今は伝存しない。」とされている。これにより、少なくとも『蜀碧』編纂時には、欧陽直の著書は既に流布していなかったことが判る。山根幸夫氏は『蜀碧』の記事により、欧陽直の著書は失われてしまったとされているが<sup>(26)</sup>、この書名は『紀乱』ではなく実は『蜀乱』であり、『欧陽氏遺書』というのは、『蜀乱』に「自紀」、「再紀」、「跋」を加えたものの総称である。「跋」によると、康熙二年（一六六三年）に著された『蜀乱』は欧陽家に伝わり、子孫の欧陽鼎によって清末に刊行されたとされている<sup>(27)</sup>。欧陽家に伝えられた原本が写本か刊本かということは、「跋」からは判断し難いが、いずれにしても『欧陽氏遺書』が中国側史料としては史料系統の明らかな、数少ない同時代史料のひとつであることは確かである。

同様に、中国側の史料で当事者によるものとしては、沈荀蔚の『蜀難叙略』がある。沈荀蔚は崇禎十五年（一六四二年）五歳の時に、華陽県令として赴任した父に従って四川に来て、実際に体験した事を基にこの書を著している。何回も手が加えられた様だが、康熙三年（一六六四年）迄の事柄が記述されているので、最終的な完成

はこの直後ではないかと思われる。従って、これは『歐陽氏遺書』とは成立年代においても極めて近いこととなるが、史料としての性質は若干異なっており、張献忠の四川支配の経緯については必ずしも凡てが一致しているわけではない。勿論、これも無批判に信頼できる史料ではない。

更に、『紀事略』や『蜀記』の様に、著者も成立年代も、従って、史料系統も全く判らないものもある。しかし、後述の様に、これらの史料価値は比較的高いと考えられる。中国側の野史は有名なものだけでも数多く存在するが、他の史料については、個々の事実の検証の際に触れていくことにしたい。

### 三 四川支配の経緯

以下において、マガリャンエスの報告書と『歐陽氏遺書』という、史料系統の異なる二つの同時代史料を中心に検討していくことによって、張献忠による四川支配について考察したい。また、近年中国および台湾において檔案が出版され研究されていることにより、根本史料である清代の檔案を、ある程度使用することも可能となってきた。張献忠関係の檔案は数は少ないが何点か存

在するので、それらも可能な限り検証していきたい。それによって、他の史料の性質もある程度明らかになるものと考えられる。

#### (一) 四川侵攻と大西政権の成立

『歐陽氏遺書』によれば、張献忠を中心とする勢力は少なくとも三回、四川に侵入している。崇禎六年（一六三三年）には「流寇張献忠は陝西から戦いに敗れて、四川に遁れた。」、同十三年（一六四〇年）には「張献忠は瑪瑙山から大敗し、再び四川に入った。」と見え、各々四川に侵入している。これら二回の侵入が、敗走という消極的な理由によるのに対して、三回目の崇禎十七年（一六四四年）の場合は侵入と言うより、むしろ侵攻とも言うべき性質のものである。<sup>(28)</sup>

ガブリエル・デ・マガリャンエスは一六四〇年以降四川布教に携わっており、最終的な四川侵攻を体験している。<sup>(29)</sup> 彼は、張献忠の四川侵攻以前の成都の様子を、次の様に記している。

「一六四四年五月初め、盗賊がその省に入ったという噂と報道がたち始めた時も、国王〔瑞王〕の軍隊が彼ら反乱者たちに対して勝利をおさめたという報道が、誤報



ではあったが毎日伝えられて広まったために、その省都  
 「成都」の人々は、平安と平穩に対して大きな希望を持  
 った。その水の量が多いことから海の「一語原文判読不  
 能。」と呼ばれている河「長江」を通して、湖広 Hb  
 quan 省から来た者もいれば、陝西 Xên Si 省から陸路  
 伝いに来た者もいた。数日を経て、北京 Pê Kim の  
 宮廷から情報が届き、国王が死んだこと、そして反乱  
 者たちが宮廷や他の省を奪い取ってしまったことを伝え  
 た。その事によって、人々は非常に落胆し、しかも困惑  
 していたので、その都市の国王やその家族、官吏、そ  
 して凡ての人々は都市全体の防御について相談した結果、  
 新しい問題が持ち上がった。即ち、混乱が余りにも甚だ  
 しかったので、都市の人々が冷静さを取り戻した時、敵  
 が目前迄迫って来ているにも拘らず、全くそれに対する  
 備えができておらず、気持ちを一にしてそれに当る態勢  
 が整っていないことを悟るに至ったのである。<sup>(30)</sup>」

この時、ブリオとマガリャンエスは情報を得て、避難  
 している。マガリャンエスは「盗賊が省都に入る前、友  
 人の忠告と山に遁れた凡てのキリスト教徒たちの切なる  
 要望により、われわれは閩老 Co Lao の村へ向かっ  
 た。その村では、われわれは彼の保護の下にそこにいる

ことができた。<sup>(31)</sup>」と述べている。ところで、グールドン  
 は、この「閩老 Co Lao」を劉宇亮に比定しており、『聖  
 教入川記』の本文では、「閩老」ではなく「劉閩老」とさ  
 れている。劉宇亮は礼部尚書兼東閣大学士から文淵閣大  
 学士を歴任しているので、「閩老」と呼ぶには相応しい。  
 仮に、「閩老」が劉宇亮であるとすると、彼らは彼の出身  
 地の綿竹県に避難したことになる。<sup>(32)</sup>

マガリャンエスはこの報告書を書くに至った経過を次  
 の様に説明している。

「二十四年前に次の様な事があった。ある官吏が陝西  
 Xên Si 省において、七、八人の罪人を罪状によって罰  
 しようと試みた。だが、彼らは単に罪を受け入れようと  
 しなかったどころか、逆に逃亡した。盗賊の首領たちも  
 時と共に非常に有力になり、大群を率いる様になった。  
 多くの省を走破し、破壊した。同様に、ますます権力を  
 持ち、悪徳をつのっていった。そして、互いに不信に陥  
 り、裏切り、そこから殺し合いをする様に迄なった。最  
 後の年には、八人から二人になった。悪事を行なう才に  
 長けていたので、二人の内のどちらが勢力を受け継ぐか  
 と猜疑心の虜になった。こうして二人は離反することに  
 なり、彼らは各々の軍隊の絶対的な指揮者になった。年

長の者は李自成 Li Sù chím とらう名で、河南 Hó nán、  
陝西 Xèn Sī、山西 Xán Sī、そして山東 Xán tūn 省を  
荒らし回り、北直隸 Provincia de Pè Kim の領主とな  
った。そして、彼「李自成」が父を殺したことに心を痛  
めて、協定を結んでタタール人たちの侵入を許さなかつ  
たその国の国境や周辺地帯を守った將軍 capitão 「呉三  
桂」がいなければ、恐らく帝国の残りの部分も、彼「李  
自成」のものとなっていたであろう。その一部始終に関  
しては、その省に滞在したパードレたちに任せる。実際  
に目撃した証人たちであるから、恐らく彼らはもっと詳  
しく報告することができようであろう。或いは、既に尊師  
に報告済みかもしれない。だから、これ以上は触れな  
い。若い方は張献忠 Chām hièn chūn、即ち、八大王  
Pá tay vām とらう。彼は南直隸 Provincia de Nán Kim、  
湖広 Hà quàn 省、そして江西 Kiam Si 省を破壊して、  
四川 Sù chuen 省へと入って来た。その途中、様々な都  
市で、斬首されるに十分値する程の破壊や残虐な事を行  
なった。その残虐さたるや、有史以来今日に至る迄、こ  
れ以上殘猛な暴君は聞いたこともない程である。その残  
虐さについて、ここで報告しようと思う。なぜならば、  
それらの地区については私は関係したし、この目で見た

教会史料を通して見た張献忠の四川支配

からである。<sup>(33)</sup>」

この様に、ここでは張献忠を中心とする勢力が四川に  
侵攻する迄の経緯が、極めて簡潔に記されている。また  
同時に、「暴君 Tyranno」というのが張献忠であること  
も明記されている。

成都で情報が定まらない時に、張献忠は重慶に侵攻し  
ている。

「四川 Sù chuen の二番目の都市であり、商業活動で  
知られており、また、その場所が難攻不落である重慶  
Chuan Kim に暴君が入ると、そこには巡撫 V. Rey と、  
陝西 Xèn Si 省の漢中府 Cidade de Han chūn のため  
に数年前に移住して来た国王の弟とがいた。こうして、  
他の盜賊を恐れて逃げて来ながら、この暴君の手中に落  
ちてしまった。その盜賊は、国王の弟と巡撫 V. Rey を  
生きたまま切り刻むことを命令した。序言に書いた様  
に、その苦痛は余りにもひどいものであった。なぜなら  
ば、足の先から始まり頭の天辺で終るまで、大小様々の  
肉片に切り刻まれたからである。それは三百、五百、  
千、二千と暴君に指示された数に従い、ひとりの人間に  
対して一日中何回にも亘って続けられた、全く非人間的  
で殘虐なものである。<sup>(34)</sup>」

これはマガリャンエスが聞き伝えたことであろう。

『歐陽氏遺書』にも、この年に「流賊張献忠は荆襄から夔関を通った。」としたうえで、次の様に記されている。

「張献忠は重慶に至ったので、副将丁頭爵は軍を率いて防衛に当った。時に、瑞王は陝西より四川に還り、また重慶城内にいた。賊は矢や石弓をもともせず、近濠の辺りを衝いた。横穴を掘り暗闇を通って、建物の壁の下に入り、その中に火薬を納めた。火薬が爆発して城は崩れ陥ちた。丁副将は烈焰の中で建物の下敷きになって圧死し、瑞王は殺害された。その頃、風雷が激しかった。重慶知府王行儉と巴県知県王錫が執えられて来た。王行儉はひれ伏したが、王錫は跪かず、汝は生きたいと思っているのか、と王行儉を叱りつけ、賊を罵って死んだ。賊は王行儉を殺し、その城を屠り尽くした。たまたま隠れて生存している者がいれば、調べ出して、またその手を切り落とした。郷村や山寨における殺戮も、またこの様であった。」

歐陽直もマガリャンエスと同様、後にこの事を知って、書き記したのであろう。

重慶を陥落させた後、張献忠は成都へ侵攻している。マガリャンエスの報告書には、その時の様子が次の様に

記されている。

「この都市〔重慶〕から盜賊は省都〔成都〕へと出發した。三日間町を包囲した後、そこへ同年九月八日の夜明けに侵入した。同じ位の日数、掠奪と破壊が続いた。国王は女性たちと共に小池に身を投じて自殺した。多くの貴族や平民も同じ事を行なった。川に身を投じる者もいれば、紐で自縊する者もいた。国王の長男は町が侵入されたのを見て、父が死んだことを知り、平和と服従の旗を持ってその盜賊に会いに来た。すると、その盜賊は親切に遇した。そして、その後で国王に対して反乱を起こし、彼を公爵もくしは侯爵の職に値するゲ・クムの<sup>35</sup>に領地と身分を与えた。しかしながら、暴君のこの寛大さは長くは続かなかつた。数カ月後、暴君はこの王子が生きているために、ある町が服従しようとしないうとして、二人の幼い子供たちと共に、彼の首を斬ることを命じた。名誉を得ていくばくも経たないのに、それを失うばかりか生命をも失うことになり、敵の手に不名誉のうち<sup>35</sup>に落ちる前に、父と共に息子たちは自ら死を選んだ。」

『歐陽氏遺書』にも同様に記されている。

「八月、張献忠は成都を包囲したが、連日の攻囲にも

陥ちなかつた。そこで、それ迄と同様に穴を掘り、八角楼の下に至り、火薬でこれを爆破した。楼は塀と共に崩れ、煙は数里を漂い、音は天地を震わせて、城は遂に陥ちた。蜀王とその妃は氷片を口に含み、井に身を投げて死んだ。城内の人々を殺戮すること三日、貴賤を問わず殺された。ただ若く美しい女性で営伍に密かに隠れていた者だけが、ようやくそれを免れることができた。兵がほしいままに掠奪するに任せて、各郷の紳士や軍民を招いて入城させた。村寨にいた者は悉く捕えられて城内に連行され、その手を切り落とされた。張献忠は兵を發して掠奪させた。各郡に有司を分設し、各路に護解官を置いていたが、兵は着くと、立ちどころに斬られた。また、成都中を調べて、宗室は婦女で満たされた。張献忠は四川巡撫副都御史陳士奇を捕えたが、彼は屈せず、賊を罵ったために、殺した。四川巡按御史劉之渤を捕えて来た。張献忠と同郷のために、劉に冠帯を授け、官職を与えようとした。しかし、一月余り経っても、劉はついに屈せず、賊に向かつて大いに罵り続けた。劉は欺いて監視の者を暫らく遠避け、その隙に蓮池に跳び込んで死んだ。」

重慶から成都への侵攻を示す点で、マガリャンエスの

教会史料を通してみた張献忠の四川支配

報告書は『歐陽氏遺書』を始めとする多くの中国側の史料と一致する。こうしたものに見られる様な虐殺の記述は張献忠にのみ限られたことではない。それ故、この時点では「屠蜀」という言葉を使うのは適切ではないであろう。それは政権成立当初、張献忠がかなりの支持を得ていたという状況によっても推測される。

マガリャンエスによれば、いわゆる大西政権の樹立は、一六四四年九月八日に成都を陥落させた直後のこととされている。そこには次の様に記されている。<sup>(36)</sup>

「九月十五日に、この暴君は国王 Regulo として王位に就いた。彼の統治は、多大な自由と正義と偉大さをもって始められたので、凡ての者を魅了した。しかし、この静けさは長くは続かなかった。なぜならば、人間らしいかぶり物を少しづつ脱ぎ捨てていき、生来の残酷な醜い素顔を見せ始めたからである。」<sup>(37)</sup>

ここでは張献忠の即位の日時が記されている。一六四四年九月十五日は順治元年八月十五日にあたる。中国側の史料でこの点が一致するものとしては、『紀事略』や費密の『荒書』がある。<sup>(38)</sup>但し、これらの史料もこれ以降の記事に関しては、日時は殆ど一致しない。『五馬先生紀年』では、重慶攻略が七月、成都攻略が八月とされている

る。<sup>(39)</sup> 地方志では、光緒十三年（一八八七年）刊の『雅州府志』卷十「勘乱」の記述が一致する。<sup>(40)</sup>

『歐陽氏遺書』には、即位は八月とされている。そこには次の様に記されている。

「張献忠は皇帝を僭称し、大順と改元した。成都の王府を宮殿にし、孫可望を監軍に加えて、文武の官を指揮統括した。平東將軍劉文秀に先鋒の印綬を帯びさせ、撫南將軍李定国、安西將軍艾能奇、定北將軍王尚礼、總理皇城都督汪兆麟を閣僚とした。他の者も各々昇進させた。部院、監寺、科道の各衙門を全て設け、成都を西の京とし、四道に学院四員を設けて、人材の採用や官僚の監督を行なった。」

ここでは張献忠は国王ではなく皇帝を称したことになる。この様に、張献忠が明の官制に擬した官僚体系を構成したことは従来より言われてきている。<sup>(41)</sup> 『紀事略』には「汪兆齡を偽東閣大学士とし、四川綿州の投降した進士の嚴錫を偽内閣学士とした。」とある。齡と麟は音が近いので、汪兆齡と汪兆麟は同一人物であろうと思われるが、どちらが正しいかは判らない。計六奇の『明季南略』卷十「張献忠乱蜀本末」には、「その養子の孫可旺〔孫可望のこと。〕を平東將軍とし、李定国を安西將軍

とし、艾能奇を定北將軍とし、劉文秀を撫南將軍としたため、四人は皆張姓をかたった。」とある。マガリャンエスの報告書にも、具体的な名前は記されていないが「養子縁組をした四人の息子たち」の事が見える。<sup>(42)</sup> この政権の成立当初は張献忠はかなり広く受け入れられた様である。成都侵攻時の虐殺にも拘らず、様々な方面からの支持を得ている。この事は、成都侵攻時の虐殺が必要以上のものではなかったことをも意味している。この時点の状況を示すものとして、マガリャンエスは次の様な例を挙げている。

「一六四三年の前年の末に、ある官吏がその省都〔成都〕に到着した。彼は南直隸 Provincia de Nán Kim の生まれであり、呉継善 V Ki xén という名であった。坊主たち Bonzos の迫害の中で彼が示した行動から明らか様な様に、彼はイエズス会の大きいなる味方であり、彼のお蔭で坊主たちが起こした中傷から、キリスト教の教えと宣教師たちが名誉を守り、逃れることができた。暴君が国王となってからおおよそ三カ月後、礼儀の最高の役人である礼部 Li pu〔大西政権の礼部尚書のこと。〕になっているが、それは彼〔張献忠〕の善政と四川 Sù chuen 全土が喜んで彼の旗下に入ったのを見て、中

国の王朝の交代や政治を経験して精通している多くの官吏たちと共に彼「呉継善」もまた自ら服従することにしたからである。間違ひなく彼「張献忠」が全帝国の絶對的な支配になるに違ひないと彼「呉継善」は確信した。そして、その善意とパードレに持っている昔からの愛情に駆られて、暴君に陳情書を出した。そこには、主の教えとわれわれの、そしてヨーロッパの科学の大いなる賞賛が述べられていた。そして、同様に、彼「張献忠」の宮廷にそういう人々を抱えて維持することは、人々や王国全土にとって役立つであろう。彼らは現在、村々や山中に退き、身を隠している、と述べられていた。暴君は陳情書に大変満足した。既に、パードレ・マテオ・リッチ P. Mathias Riccio という今は故人となったパードレの偉大な名前と、それ以外の多くの事、そして、今は亡きパードレたちがこれ迄に行なってきた、今もなお行なっている多くの事柄の評判も彼「張献忠」は聞いている。かくして、大きな欲求に駆られ、それよりもむしろ価値を求めて、すぐにわれわれを非常に丁重に招く様に命令を与えた。家来としてではなく、遙かな遠方からの外国人として、しかも、彼の言葉を借りれば偉大な西方からの外国人として招くことにした。われわれは来たが、午

後であったので宮殿に入ることはできなかった。そこで、われわれは光祿寺 Quan Lu Su に迎え入れられた。そこは国王の宿泊所となっていた所である。他日、われわれは国王に会いに行つた。その当時、彼「張献忠」はその善政のために、この名に相応しかつた。ヨーロッパについての多くの質問や回答の後に、彼はわれわれの方を振り返つた。そして、次の様に言つた。王国の諸々の事件を鎮め、調停するのにまだ数カ月を必要とするが、それが過ぎたら、中で天と地の主を崇拜できる様な美しいひとつの教会を建てよう。中国人は非常に邪悪なのでその教えに従つたり、守つたりしないのではないかと危惧している、と。<sup>(43)</sup>

ここから、呉継善を始めとする明の遺臣がその政權下に取り込まれていったことが判る。そして、成都市内から避難していたブリオとマガリャンエスもまた、呉継善を通して招き寄せられている。この様な形で彼らも政權に取り込まれている。張献忠は彼らの後見人になることを約束しているが、その言動がそもそも矛盾している。この傾向は後に更に拡大していくことになる。

マガリャンエスの報告書には、張献忠がブリオとマガリャンエスを如何に厚遇していたかを示す記事は多い。

次の様な記事がある。

「張献忠の許に来てから、」五日過ぎて、中国人の大きな祝いのある冬至に、われわれは宮廷に招かれた。そこで暴君は、われわれに新たに名譽を与えた。凡ての文官と武官が呼ばれて、皆が十分に入ることができる、七十二本の柱がある国王の部屋の中は、全部で千人位になった。われわれが一番末席に連なっていると、暴君はわれわれに席を指示した。最初の場所に対して、われわれは何も厭だと思っていたわけではないにも拘らず。それで、第一番目の席には閣老 Cò Lao が就いた。二番目と三番目はルイス・プリオと私。四番目には、後述の様に、後にキリスト教徒となった国王の舅。そして、他の者たちも各々その身分に応じて席についた。宴が続いている間、われわれはキリスト教やヨーロッパや数学について質問を受けた。われわれが自分たちの知識と思慮分別ならびに才能をもって答えた事柄について、暴君は色々と思考していた。このため、われわれは彼に対して感嘆した。そして、事実この人物について考えてみるに、彼は中国の帝国 Imperio [皇帝 Imperador の誤りか。]に相応しい。なぜならば、国王、それも良い国王であるために彼に欠けていることはと言えば、残虐でないことだけだ

からである。<sup>(44)</sup>」

ここではまた同時に、マガリャンエスが張献忠に対してどの様な見方をしていたかも示されている。張献忠の残虐さが強調されているが、この時点では張献忠はまだ残虐な行為は行なっていない様である。マガリャンエスは張献忠の残虐な性質を強調している一方で、彼の指導者としての優れた資質を認めていることは注目し値しよう。

## (二) 漢中攻略の失敗

こうして成立した大西政権も、成立後間もなく崩壊の危機に曝され、それにより状況も一変する。マガリャンエスによれば、張献忠の四川支配が破綻をきたした直接の原因は、漢中攻略の失敗にあるということである。そこには次の様にある。

「陝西 Xên Si と四川 Sú chuén の境をなしている所であり、これら二つの省の要塞であり鍵とも言うべき地である漢中府 Cidade de Han chün を、暴君は攻撃した。暴君はこの領主となることを望んでいた。それは、目下四川 Sú chuén の要塞を確保するためであり、今後陝西 Xên Si の要塞へ自由に入るためであった。そし

て、その結果、そこを占領するために、大きく強力な軍隊を送ることになった。しかし、守備隊として駐屯していた人々は、暴君の軍隊に危害を加えた。その要塞は四川 Sù chuán の大部分であり、その時は戦闘をしており、土塀の様な或る種の様相を呈していた。守備隊は自分たちの居住地を後にして都市の中央へと進んだ。この出来事が発端となり、またそれが原因となって、非常に野蛮で残酷なこの暴君は身を滅ぼし、しかも四川 Sù chuán 省を荒らして破壊することとなったのである。それは以下述べる通りである。このために彼が心に抱いていた怒りと憎悪の感情を満足させるために彼は四川 Sù chuán で彼が持っていた兵士凡てを殺すことを命じた。彼は多くの者を生きたまま皮剥ぎにした。そして、皮で以て頭を結び付け、そこに藁を詰め込んだ。それらを彼自身の都市や町に送って、これにより恐れを植え付け一層用心させることを企てた。しかし、反対の事も起こった。なぜならば、両親たちは息子たちが、息子たちは両親たちが、これ程残酷に死刑に処せられたのを見たからである。当然のことながら、彼らは悲しみと悲痛な気持ちで暴君に対して武器を取った。暴君は彼らよりも悪賢く老獪で、しかも強力であったので、ただちに彼らを打破し

た。そして、彼らを破滅させた。そのことは他の人々の耳にも入った。彼らも同じ事をした。そして、彼らもまた破滅の道を進んだ。この様に侵攻して行って（暴君に特有のものであった残酷さを自ら示せば示す程、人々は反乱を起こすものである）、彼も彼らも完全に消耗しきるに至った。<sup>(45)</sup>

この様に、漢中は軍事的に重要な都市と見做されていた。この漢中攻略が如何なる形で行なわれ、当時そこを占拠していたのがどの様な勢力であったのか、ということについては、マガリャンエスは一切触れていない。また、日時についても記されていない。『歐陽氏遺書』には「乙酉（一六四五年）、張献忠は大挙して漢中に出たところ、賀、李の軍とぶつかり、敗れて還った。」とあるが、この記事が僅かにこの事を指しているものと思われる。『紀事略』にも「明将賀珍に遇い、大戦した。……賊兵で死亡したのは半ば以上であった。」とあるが、日時も記されておらず不明確な点が多い。

この当時の状況を伝えるものに、清朝の檔案がある。順治二年（一六四五年）三月二十五日の総督陝西全省軍務統属文武、兼理粮儲、刑部右侍郎孟喬芳の啓本（摂政王ドルゴンに対する上奏文）には、次の様に記されている



る。

「また、漢中府の流賊総兵賀珍、党孟安、羅岱、郭登先の四人は既に表を投じて帰順した。臣はそのうちの二人に漢中を守らせ、二人を西安に赴かせ軍議に当らせた。その漢中道府の郷紳、士民人等は各々表文を具えて投降し、皆次の様に言った。賀珍等が李錦を殺し、八大王を撃ち敗ったのは事実である。なおかつ規律は非常に厳しく、民間の物を僅かたりとも犯すところがなかった。これから見れば、帰降は必至であった、と。」<sup>(46)</sup>

これにより、先に賀珍等が清軍に投降し、漢中の防備に当らされていたことが判る。マガリャンエスの報告書の記事は、大西政権に下った明の遺臣李定国の軍隊が同じく清朝に下った賀珍の軍隊と対戦して敗北したことを示していることになる。尚、『歐陽氏遺書』で「李」とあるのが、李定国を指しているとする、と、欧陽直は事実を誤認していたことになる。

漢中攻略の失敗後、事態は急転する。四川はまさに恐怖政治の下に置かれた様である。マガリャンエスはその様子を次の様に記している。

「この暴君があらゆる地位あらゆる身分の人々凡てに對して行なった残虐さは、信じ難く説明し難いことであ

る。彼は虎や猛獣ではなく、むしろ見つけたものには凡て噛みつき菌形をつける、狂犬病にかかったか或いは狂った犬の様であった。宮殿では、彼に奉仕する者たち凡てに、乱暴な振舞いや殺戮が行なわれた。そして、彼に真似て町々では裁判が行なわれ、不正な判決がなされた。人々は絶え間ない恐怖に襲われ、次々と迫ってくる混乱に突き落とされた。そして、それはわれわれ自身が経験したことでもあった。哀れな人々を見て、まさに最後の審判を迎えようとしている時の様な混乱を体験しているのだ、とわれわれは説明した程であった。友人たちの間でも交渉は行なわれなかった。親戚たちの間でも、訪問しあう様なことはなかった。二人の間での対話というものは許されなかった。もし、それを犯したら、ただちに皮を剥かれるという罰を被った。夜の帳がたちこめ、戸口が閉ざされるや否や、口も閉ざされた。戸を開いたり、家の中で灯りをともし最小限の言葉で話しても、すぐに死刑に処せられた。隣近所十軒の人々が互いに潜みあった。父親たちは息子たちを訴え、息子たちは父親たちを訴えた。この様にして、暴君から多くの者が褒められた。多くの者が互いに噂しあった。官吏たちが宮殿に行く時でさえもそうであった。すぐにスパイが来

て、大勢に話したわけでもないのにその内容を尋問した。それは多大な恐れと恐怖を呼び起こし、もはや人々は生きている心地がせず、それどころか沈黙した像、或いは死者の肖像であるかの様な心持ちすらした。われわれも同様であった。われわれは当初われわれの間で話す言語のポルトガル語の独自性により、安全な立場にあり、危険を免れている様に思った。われわれはまた、われわれが何を話しているのかを何回も尋ねられた。従って、スパイたちがわれわれを連行し、そして、他の人々を理由も根拠もなく弾劾する機会を、スパイたちに与える様な危険を犯すよりは、われわれは他の者とは口をきかない肖像になった方がいいと考えた。彼らは悪事をなそうという意図の下にその様なことをしただけでなく、そうしないと暴君が自分たちを罰するので、彼らが誰か他の者を告発することなしに、暴君の前に出る様なことにならないようにするためであった。なぜならば、彼らが怠慢であり、しかも自分に愛情を持っていないと言つて、即刻暴君は皮を剥ぎ取ったからである。というの(47)は、これ程広い地域や宮廷で罪や悪業が行なわれな(47)いことは到底あり得なかつたからである。」

現在、北京大学図書館に碑文の拓本が残っている「大

西驍騎營都督府劉禁約」には次の様にある。

「本府〔劉〕は公平に法を奉じ、号令〔罪人を刑に処して衆に示すこと。〕は嚴重であり、必ず兵と民が本分を守り、互いにいざこざがなく、断じて嘘をつかないことを望むものである。各駅・鋪〔下欠〕に申しつけ、約法数章を守らせる。もし、犯す者があれば、約法に照らして処分する。

特示する。

一、府部の明文を受ける前に、勝手に兵を募ってはならない。他の地方に害を及ぼす者は、その地方の士民は軍前に鎖で縛って連行し、法に照らして処罰することを許す。もし、匿って検挙しなければ、皆同様に連座させる。

一、往来する差拿〔とりかた〕や暇を弄ぶ員役は、勝手に駅伝の馬や兵を動かしてはならない。調べ出し、縛り付けて打刑にする。

一、その地方を専門に防衛している武官は、勝手に民の訴えを受けてはならない。違反した者は弾劾する。

一、皇帝の軍を口実にその地方に害を及ぼしてはならない。担当の地方官は事実を調査して報告し、その結果によって曝し首にする。

一、無頼の棍徒は營に参加し、ほしのままに訴えを起こし人を欺き、妄りに良民を書してはならない。違反した者は縛り付けて打刑にする。

一、土地を守る文武の官員は、ほしのままにその土地の婦女を娶って妻妾としてはならない。もし、違反すれば弾劾する。

大順二年三月 日。<sup>(48)</sup>

大順というのは大西政権の年号である。大順二年は順治二年（一六四五年）にあたる。大順という言葉は、大西政権成立当初の理念を表わしたものであると考えられる。これは従来は、大西政権の自律性を表わしたものとして積極的に評価されてきたが、以上の様な状況を考慮に入れると、むしろ恐怖政治の反映であると見做すことができるのではないであろうか。

順治二年（一六四五年）八月四日の巡按陝西甘肅監察御史魏瑄の啓本には次の様に記されている。

「該臣の見たところ、反逆した張献忠は四川の中に孤立し、その勢いは追いつめられた獣と同じである。鞏県の領内に接近し、あたかも虫が蠢き出そうとしているかの様である。もし、取り除くことを急がなければ、必ずや陝西に災いをなすであろう。私は朝を辞した日に内院

にじかに陳べ、切々と漢中の事を考えたが、今は果して見通しがつき難い。河西一帯は広大であり、兵は皆空腹であり、將に専官がなく、とりわけ心細さを感じるものである。<sup>(49)</sup>」

清側も、張献忠を中心とする勢力を取り除くことの必要性和その難しさを、認識していた様である。漢中はまた、四川侵攻の拠点と見做されていたものと考えられる。

この後、実に奇妙なことが起こっている。マガリャンエスの報告書に次の様にある。

「その暴君が欲した事であるが、そして既にわれわれが言った事でもあるが、彼は陝西 Xén Si 省の境界にある漢中府 *Cidade de Han chün* を取ることができなかった。それにも拘らず、彼は四川 *Sü chuén* 省の要塞と省の境界に守備隊と兵隊を置くことを止めなかった。そこで、省都を取って一年二カ月後の一六四五年十一月二十二日の夜に、彼に対して夥しい人数からなる強力な軍隊が近付いているという緊急の知らせが入った。そこでただちに次の朝、彼は自分の文官と武官を呼ぶことを命じた。そして、彼は言った。宮廷の者は敵たちと密かに誼を結んで反乱を望んでいる。それ故、ひとりも残さず

凡てを殺すことを決心した。また、他日のために敵を迎え撃ち、河の通行を妨げる準備をすることを決心した、<sup>(50)</sup>と。」

一六四五年十一月二十二日は順治二年十月五日にあたる。張献忠は成都において不在期間に反乱が起きることを恐れたためか、この直後に虐殺を行なっている。マガリャンエスはこの様子を次の様に記している。

「暴君はすぐに、あの大きく、しかも人口が多い都市「成都」を、本来住んでいた現地の人々のいない、無人の孤立した状態にしてしまった。周囲を囲む様に流れていた河は染められ、まるで水ではなく血の様であった。しかも、死体が充満していたので、海に注ぐ非常に水量が多い河であるにも拘らず、何日にも涉って航行することはできなかった。河に隣接した都市や町はあれ程の残虐さに恐れおののき、そして、理由が判らなかつた。」<sup>(51)</sup>

その後、陝西へ行軍したことをマガリャンエスは伝えている。

「人々が死んだ後、暴君はその周囲に待機していた自分の野営部隊の大部分に対して、都市の中へ入る様に命じた。そして、すぐに敵と対決するために陝西 Xên Si

省へ向かった。しかし、その敵は遂に現われることはなかった。そして、後にわれわれが人々の殺戮が行なわれ、この暴君が攪乱を示した原因を知ったところによると、四川 Sù chuen 省と隣の省との境界のすぐ前で、陝西 Xên Si の者が行なった策略に過ぎなかつた。」<sup>(52)</sup>

ブリオとマガリャンエスは張献忠の四川侵攻時には「閩老 Co Lao」に保護されていたことが、マガリャンエスの報告書には記されている。マガリャンエスの報告書では、この「閩老」と、この時点で「暴君が去った後に彼の代わりに統治していた閩老 Co Lao」とは、区別されてはいない。一方、『聖教入川記』では、マガリャンエスらを保護した「閩老」は「劉閩老」と、張献忠の不在期間に統治したのは「某閩老」と、各々表記されている。そして、劉宇亮は既に没していたとされている。グールドンは、この時点で「閩老」がマガリャンエス等に危害を加えようとした状況等から、別人であると推測し、訳し換えたのではないかと思われる。しかし、両者が別人であると判断できる材料は、同時代史料にはない。マガリャンエスの報告書では単に「閩老」とされているだけで、状況によって区別されてはいないうえ、それ以前に「閩老」が没したという記事も見えない。従っ

て、両者は同一人物である可能性が高い。一六四〇年のイエズス会中国年報にも既に「閩老」の事が見えるので、<sup>(53)</sup>「閩老」が大西政権の偽官ではなく、明朝のものを指していることは間違いない。野史には劉宇亮の名が見えないという問題は残るが、ここでは「閩老」を劉宇亮に比定しておきたい。少なくとも、この「閩老」が張献忠の四川支配の鍵を握っていたことは確かであろう。

ところで、この事件に関しては更に意外な事後処理がなされている。

「暴君は、この村から省都と全省に、敵との会戦について、未だかつて聞いたことのない様な輝かしい大勝利を得た、と報道することを命じた。それは、三十万の歩兵と十六万の騎兵を殺した、というものであった。すぐにわれわれは嘘であると気付いた。というのは、情報を捏造することにおいて、この暴君は非常に悪賢かったからである。かくも偉大な勝利から凱旋した時に、われわれはその凡てが陝西 Xan Si 省の境界で彼が捕えた二人の中国人商人に帰することができることを、しかと確認している。<sup>(54)</sup>」

この様に異様な事件であるにも拘らず、中国側の史料で、直接これに対応すると思われる記事はない。しか

し、僅かにほぼ同時期の清側の記録が残っている。順治二年（一六四五年）十一月二十八日の清朝に投降した賀珍の掲帖（上奏文の写し）に、「十月の内に、張献忠が我が辺境を乱したため、総督に上申が届いたので、総督は前営□□参将王加貴、苗希旺等を遣して四川に入らしめ、敵の総兵、并に三千余りの兵を、捕虜にして斬殺させた。既に、広元、保寧地方を取り戻し、手に入れた偽印と具さに知り得た状況とを、既に総督に齎した。<sup>(55)</sup>」とあり、張献忠が漢中攻略を試みたことは事実と見做すことができる。

この直後に生員の虐殺が行なわれている。マガリャンエスの報告書に次の様にある。

「注目すべきは、この暴君が官吏及び彼らに関する諸々の事柄と、生員 *Estudante* の称号に関わるあらゆる事に対して持っていた憎悪である。そして、この継母の様な邪な心を満足させるために、彼は公の布告によって、次の様に命令した。凡ての挙人 *Bachareis* と、まだ試験を受けている者ともう試験から解放されている者とを問わず、その他の凡ての生員 *Estudantes* とは首都と宮廷へ来る様に、と。彼が総合的な試験をしたいからであり、そして彼の宮廷と王国を支配する人々を選びたい

からでもある。これらの中国人たちは、この件に魅了されてしまい、しかも彼らは官吏の榮譽に対して貪欲であるので、この暴君が何かしら学識の薫りのある人々に対して行なった処刑と残虐さを知ってはいるが、それにも拘らず、凡ての人々が彼に服従し傾倒したのである。ところが、彼は毛筆の代わりに刀を、墨の代わりに彼ら自身の血を与えた。彼らに対する不信の故に、彼らを間違った信仰の持ち主と呼び、彼はひとりも容赦せず全部で一万三千人を斬首した。<sup>56)</sup>」

これについては『歐陽氏遺書』に次の様にある。

「張献忠は科挙を行なうことを定めて例とした。郷試を受ける生員と会試を受ける挙人で遅れて来た者に対しては、その妻女を妓館に収容させた。もとより皮剥ぎを行ない、試験を司る教官と共に斬るつもりであった。左右の者たちも隣に連つて誅に座したが、そのうえで、周囲の十家を調べて明確にさせた。時に、郷紳を呼び出して入京させたが、遅れて来た者に対しては法はこの様であった。」

これは順治二年の事とされているが、それ以上の日時等は記されていない。全面的な虐殺とはなっていない点で、マガリャンエスの報告書とは異なる。マガリャンエ

スの報告書に見られる様な虐殺は、『歐陽氏遺書』では順治三年の事とされている。そこには次の様に記されている。

「張献忠は遠近の郷紳を呼び出して、成都に赴かせて、これを殺し尽くした。各学の生員に試験を受けるよう呼び出し、ただちに、これを監禁した。大慈寺に集合させた日、寺の門の両側から、各兵站の武装した兵士たちが三隊に分かれて、南城に至った。張献忠は街頭に座り、某かの指示を發した様であった。試験場の前を一人が過ぎ、高竿を執り白紙を懸けた。その旗の上には、次の様に記されていた。某の府州県の生員と教官は前に受験者が来て、各々が従僕と手荷物を従えて、後に連なる形となって、そうして行って城門の入口に至れ、と。手荷物を打ち落とし、衣服を剥ぎ取ると、一人の武装した兵士が一人を捕え、連行して南門橋の上に至り、そこで斬つて水中に投げ入れた。教官と学生、主人と従僕は悉く清流に付し、河の水は真っ赤になった。屍が積もり流れを阻んで十日余りして、ようやく流されて一掃された。」

この生員の虐殺については、中国側の野史の多くが伝えているが、日時や規模についてはまちまちである。

『蜀記』では、これは十月から十一月にかけての事とされている。この点についてはマガリャンエスの報告書と矛盾はしない。虐殺された者は、受験者のみで千人以上、僕従は一万人以上となっているので、この点もかなり近い。他の記事がマガリャンエスの報告書と大きく異なるのにも拘らず、この事に関してのみ一致点が多いのは、それだけこの事件が有名であったということなのであろうか。『五馬先生紀年』には、順治二年に科挙が行なわれたことだけが記されている。いずれにしても、この事件が順治三年であったとは考え難い。『蜀碧』には、『歐陽氏遺書』の著者歐陽直はこの時の生き残りであるとされている。しかし、『歐陽氏遺書』には、その事については何ら触れられてはいない。

この当時の情勢について、既出の順治二年(一六四五年)十一月二十八日の賀珍の掲帖には次の様に記されている。

「はからずも、張献忠は兵を動かし、既に漢中城を占拠した。私は力を尽して討伐し、まず賊の先鋒を挫いた。そこで、以前と同様に規律を厳しくし、士民を安撫した。すぐに、順治年号を称し、文書で降伏を示させ、英王と総督の孟喬芳により、與維新を讃えて、漢中総兵

の官を文面で授けた。継いで、李自成の殘党、偽侯伯李錦、高一功、李友、田虎等の数營の衆が地方を蹂躪した。私は再び追ひ立て討伐したので崩れ去り、かつまた面従背反で、害をその地方に齎した党孟安、郭登先を殲滅させた。これにより、漢中府所屬の地方は安堵され、民は寝る場所を得ることになった。」

勿論多少の誇張はあるであろうが、張献忠が漢中攻略に再度失敗したのは確かな様である。即ち、大規模な漢中攻略の失敗は、順治二年(一六四五年)中に二回あったことになる。『荒書』には、張献忠の漢中攻略の失敗は、順治元年(一六四四年)十一月とされており、『蜀難叙略』にもこれは順治元年の事とされている。張献忠がこの時点から漢中を窺っていた可能性はあるが、最初の漢中攻略の阻止を報告した清朝の檔案が順治二年(一六四五年)三月二十五日付であり、『歐陽氏遺書』でも順治二年となっていることから、順治元年(一六四四年)に漢中攻略が行なわれたとは考え難い。

### (三) 四川破壊——いわゆる「屠蜀」について

漢中攻略の失敗以降、状況は更に一変する。当時の張献忠の考えを示すものとしては、マガリャンエスの報告

書の次の様な記事を挙げる事ができる。

「……この日、暴君は自分の将兵たちと再び話し合った。中国、日本、トンキン、Tum Kim、コーチシナ Cochin China、そしてタタール Tartaria を取った後に、インドやヨーロッパを征服しようと思う、と彼は言った。このために、彼はわれわれにそこに至る道についてあらゆる事を尋ねた。どれくらいの距離があり、そしてそれにはどれくらいの時間がかかるのかを、われわれに尋ねて、大きく笑った。そして、これには海路であれ、陸路であれ、雲南 yun nan 省と緬甸 Mien que (これは小さな王国であり、この省と接している。)を通れば、すぐにヨーロッパだ、と付言した。しかし、その後熟慮した末、彼は最も良い意見を採用した。こうして何日かが過ぎ、別の機会にヨーロッパの巨額の富と、われわれが途中に経験した困難の大きさについて、彼は語った。彼はわれわれに、次の様に述べた。あなた方は神の法を植え付けに来る。しかし、われわれ中国人は非常に邪悪なので、それを受け入れることを好まない。このため、天は百年、二百年、そして三百年毎に、<sup>(58)</sup>支配を変動させることでこの王国を罰するのである、と。」

この様に、張献忠は誇大妄想とも思える計画を持って

教会史料を通してみた張献忠の四川支配

いた様である。マガリャンエスの報告書には、中国人の本性は悪であるという張献忠の考え方がしばしば見られる。「われわれ中国人」とある様に、自らもその範疇に入れているにも拘らず、この様に矛盾した発言が多い。恐らく自分自身は例外であったと考えていたのであろうが、マガリャンエスの報告書には、その理由を示している見做すことのできる次の様な記事がある。

「省都の人々が死んだ後に、再びこの暴君は近隣の町や村から人々を呼び付け、新しく住民を入れる考えを持った。しかし、四川 Su chuen の幾つかの都市は、彼の甚だしい残虐さに激怒していたので、彼に対して暴動を起こした。彼は考えを改めて、この様にこの省の生きている者凡てを殺すこと、そして、彼自身が言明した様に、そのうえで改めて他の省の人々と取り替えに行くことを決心した。彼の部下にこの事を納得させるために、ある日の午後、彼は突然次の様な馬鹿げた事を言い出した。第一に、他に類例を見ない程厚顔無恥にも、次の様に述べた。自分はもう既に完全でしかも完成した聖なる者であり、自分が知らない事はない。第二に、これにより天は、彼を中国の皇帝に決めた。第三に、この真理を証明するために、天の書にはこれこれの事が書いてある。そ



して、彼に生じた更に顕著な事柄を本の文字で説明し、本の文章をそれに準えた。第四に、その朝引いた三つの籤 *sortes* によると、天は彼の意図を是認した。一番目のは陝西 Xên Si 省を征服することである。籤には次の様に答えてある。お前のものではない土地へ行く権限が誰にあるのか、と。二番目の籤には、次の様に出た。湖広 Hô quan 省や南京 Nan Kim へ下れ。そこは非常に良い。しかし、今はその時ではない、と。三番目の籤（それは彼が四川 Sù chuen の者に対していただいていた嫌悪により、彼が望んでいたものであった。）には、次の様に出た。以下われわれが言う様に、凡ての者を殺戮し尽くす迄、四川 Sù chuen に留まれ、と。そして、これは彼が現実に行なったことであった。第五に、彼の無分別にして度をはずれて甚だしい狂気は、次の様なものであった。あの前夜、眠っている間に、そして監視している間に、彼は大音響を聞いたと偽った。（実は彼はその夜雷鳴を聞いたのだ。）凡ての者が驚いて目を醒まし、自分の妻たちに向かつて、ひょっとして外の宮殿の中庭で太鼓を叩いているのか、と尋ねた。しかし、そうではないことが確実になったので、天なる彼の父が彼に行動を促した無言劇であることがすぐに解った。こうして彼は外に出

て、輪の形になった紙が凡て稲妻によって焼かれたのを見出した。その紙には、エネアス Eneas 「ローマ建国の祖とされている。」の保護と同様に、彼の運命の全てが書かれていた。即ち、彼は中国の皇帝になるに違いない。それ相当の將軍や国王、かくかくの公爵、これこれの伯爵をつくらなければならない等々、と。彼は、自分の部下たちの間に、敢えてそれを疑う者がいない程の雄弁さで語り、強力な実行力をもってそれを行なった。しかし、次の様に言った者もいた。既に目の前で斬首された閣老 Co Lago の書記の死の原因を知っているのは、パードレ・ルイス・ブリオである。それはこの紙を書いたからである。その書記は命懸けで危険を犯し、秘密を暴こうとしたのだ、と。第六に、その夜、彼は彼の蔵書の中から未知の書を見付けた。そこには、彼の生存中の肖像が描かれていた。それは、われわれがカーザの中に持っている様な、様々な経や肖像の載った一冊の中国の本に過ぎなかった。彼はその内の一頁を示した。それは彼自身の手になるもので、彼が名付けた物である。<sup>(59)</sup>

大西政権の成立以後、四川を中心として自らの勢力範囲を拡大しようとしていた張献忠が、この時点からその方針を転換し、本格的に四川を破壊することを決意した

理由が記されている。成都を破壊したものの、まだ成都を活動の拠点とする考えは棄てていなかったのである。抵抗した諸都市というのが具体的にどこを指すのかということについては、マガリャンエスは記してはいない。マガリャンエスが挙げた張献忠の六つの暴言は、張献忠の神聖さと支配の正当性を主張しているという点で共通している。張献忠の四川支配と破壊は天命によるものである、と彼自身が主張していたということは、『蜀碧』を始めとする中国側の史料にも見られる。中でも注目すべきは、第五番目の雷鳴の事件とほぼ同内容の記事が『蜀記』にも見られることである。<sup>(60)</sup> 第四番目の籤の話は多分に創作めいているが、或いは張献忠自身の創作であるのかもしれない。彼はこの籤の内容を実行しようとしている。マガリャンエスの報告書には次の様にある。

「前に述べた籤により、また自らの残虐さにより、暴君が決断したので、人々は暴君に命乞いをした。暴君は自分の凡ての軍隊と共に出発し、大人も子供も、少年も老人も殺した。彼は都市や町や村を焼き尽くし、その結果、凡てが灰に帰して、ただの一軒の家も残らなかつた。……多くの者が暴君に言った。これは中国の国王になるための、閣下が望む緑の王道ではない。われわれを

許してもらいたい。そうすれば閣下はその地位に就くことになるであろう。もし、閣下がわれわれを殺すなら、それは同様に閣下自身の破壊にも繋がるということをよく認識しなさい。誰が閣下の畑を耕すのか？ 誰が閣下の軍隊を維持するのか？ 別の者はこうも言った。暴君は何を望むのか。われわれが持っている金、銀、小麦、米、そして、凡ての物を望むのなら、どうぞ持って行きなさい。だが、生命だけは許してもらいたい。何故、われわれを殺すのか？ また、閣下ではなく、他の者ならば、悲しみに心を揺らされる様な、その他の様々な打ちを何故するのか、と。<sup>(61)</sup>」

ここでは、張献忠による破壊が極めて大規模なものであり、それにより張献忠の軍隊を維持することすら難しくなる、と考えられていた程であったことが記されている。同時に、張献忠が残虐行為を行なう理由が、当時の人々にも理解されていなかったことが判る。やがて、張献忠による殺戮は四川全省に及び、次第に政権内部の者に対しても及んでいっている。

「暴君と多数の隊に分割された將軍たちと軍隊が全省を殺戮し、そして蹂躪した四十日が過ぎ、暴君は彼の部下たちにチャシーシャ Chassixa 「意味不明。」をするた

めに、省都へと戻った。その途中、彼に随行した文官三十人のうち二十五人を、彼は矢で耳に穴を開けた。将兵の功績、罪状や賞罰を把握していた最高の文官である兵部 *Pin pa* を、彼は殺した。武器を持って殺戮に従事し、今尚彼が従えていた四川 *Sü chuen* の五千人の兵士を彼は殺した。彼は多くの者たちに対して鞭打ちを加え、斬首し、皮を剥ぎ、そして寸断した。それ故、何人かの偉大な將軍たちや多くの階級の低い者たち、そして大勢の兵士たちといった、尚彼の監視の下にあった者たちは、ただ暴君の残虐さから逃れるだけのために、縄で自縊したり、川に身を投じて溺死したりした。その残虐さと言えば、凡ての悪人どもを殺戮し尽くし、ただ十人だけを生かしておく、それ迄は決してやめない、と彼自身と言った程であった。この暴君は、どこであれ私が行くところでは、自分に従う人々を改宗してはならない、としばしば繰り返して言った。なぜならば、聖人がどこへ行こうと、凡ての人々を後に従えることはできないからである。すぐに暴君は自らが奇跡 *milagres* と呼んだ多くの虚構の話を語り始めた。それは次の様な話であった。少年の時に、彼は官吏になった。そして同じ年頃の者たちに対して、大きな権力を振るった。時とともに、

昇りたい時に天に昇り、降りたい時には地獄に降りるといった、聖者の域に到達した、というものである。彼が語ったこうした気違いじみた話を、彼は自分の生涯について著述された本や年代記に書くことを命じた。<sup>62)</sup>

この時点で張献忠は、ブリオとマガリャンエスの二人に対して布教を禁じているが、その理由については不明確である。自らを聖人であると言うその発想は、先程の記事と共通するものである。科挙と偽って読書人の虐殺を行なった張献忠が、若くして官吏になったと言っているのもおかしな話である。尚、張献忠の虚構の話を記した本や年代記というのが、現存しているかどうかは不明である。

マガリャンエスは張献忠が自らの宮殿を破壊していることを伝えている。

「一六四六年七月七日、二番目の城壁の宮殿の内側に、暴君は火を放った。そしてその最上部から、彼は大いに愉しんで飲み食いをしていたが、まるでもうひとりのネロ *Nero* の様に、古く美しい建物が破壊されるのを見ていた。そういう行為を、彼は殆ど意に介さなかった。というのは、そうしたものはその省都と省の王国のものであり、そして、二百年か或いはそれ以上の年月を

経た以前に、過去の国王たちによって作られたものであったからである。<sup>(63)</sup>

こうした破壊の後に四川の人間を殺した者に対する表彰が行なわれている。マガリャンエスはこれを、次の様に記している。

「都市〔成都〕を出て三日目に、前述の広場において、更に哀れな悲劇、否、既に見てきた様な更に生々しい地獄絵が展開された、と言った方がいかもしれない。なぜならば、前の夜に班長に匹敵するひとりのクォン・タウ Quon tad〔何を指すかは不明。〕が逃げたというただそれだけの理由で、暴君は百人以上の將軍の皮を剥いだからである。その後、続いて功労に対する表彰が行なわれた。四川 Sü chuen の者八十人を殺した者は、功績として表彰された。他の功績があれば、六十人乃至七十人を殺した者も、彼は同じく表彰した。さもないければ、彼は斬首することを命じた。別の功績があれば、という条件付きで、五十人から下三十人迄については、自分がよしとする者に対しては、恩恵により生命を救ける、と彼は言った。但し、厳しく鞭打った。三十人から下二十人迄の者たちは、凡て首を斬られた。二十人から下については、邪悪な人間であるという理由で皮を剥が

れた。つまり、大勢殺戮した者は善い人間と評価され、少ない者は悪い人間とされたからである。この様にして暴君は、非常に邪悪な両極端の評価に彼らを振り分けた。功績を立てた者には褒美が与えられ、そうでない者には死が与えられた。そして、たとえこの基準が守られたとしても、永年に亘って多くの功績を挙げてきた多くの者たちには、それ程奇妙な事とも思われなかったであろう。<sup>(64)</sup>

この時点で張献忠による攻撃が、四川の者に対して向けられていたことが判る。

マガリャンエスは続いて、張献忠が宮殿を焼いた後に、成都全体を焼いたことを伝えている。

「同月〔七月〕十四日、暴君は彼の宮殿の残りの部分凡てを、都市凡てと共に焼くことを命じた。その結果、ただの一軒の家も残さずそれは焼けた。しかも、彼は非常に狂乱していたので、家だけでなく、まだ使うことができるであろう材木をも積み上げて、焼くことを命じた。こうして、その美しい都市は凡て焼かれて、荒らされた。<sup>(65)</sup>

この頃、政権内部の者に対する締め付けは更に厳しいものになっている。マガリャンエスは次の様な事件を伝

えている。

「国王の建築事業を担当する最高の官吏である工部 Cui pu 2、四川 Su chuen の五人の役人が逃げ込んだ。この暴君の怒りは激しく、何日もの間良識を失い、狂暴となっていたことにより、彼〔大西政権の工部尚書〕に百五十回の鞭打ちを科した。そのうえ、暴君は同じ工部 Cui pu の二百八十人の役人を殺した。そればかりでなく、この官吏の下にいた僅か七十人が、他の將軍たちによって各々分担管轄されていた三千人から四千人に上ったと思われるその他凡ての者たちを四十人ずつ縛った。そして、日中はその各々にひとりずつ兵士を付き従う様に手配した。夜はその四十人の中にまじって彼も縛られて眠る様にした。この様なわけで、見張りをする者もされる者も同じ苦痛を味わった。この暴君が熱中した事といえば、自分の趣向を満足させ自分の残虐さを満足させることだけであつた。<sup>(66)</sup>」

宮殿についての記事も、マガリャンエスの報告書に散見される。「九月三日、暴君は広場の中に新たに造つた宮殿を焼いた。しかも、彼はすぐに続いてそれを真似て、城壁の外にあり、都市の四つの入り口に通じている美しい十二の町を焼いた。<sup>(67)</sup>」とある様に、張献忠は再度宮

殿を造り、周辺の町と共に再度焼いている。

こうした張献忠の残虐さについて、マガリャンエスは次の様に説明している。

「この暴君がこの日〔九月三日〕から引き続き示してきた狂乱状態とも思える残虐さや激情は、信じられない程である。王国も人々も、官吏も兵士も彼の目には入らず、彼自身が言明した様に、彼を怒らせて、そして、多くの人間を殺戮させた罪を閣老 Co Lao ひとりのせいにした。それを暴君は知っていたけれども、そのために自らを正すことはしなかった。それどころか、更に残酷に、更に激烈に、将兵の内の優秀な者たちを毎日殺していった。<sup>(68)</sup>」

この頃になると、張献忠による政権内部の者に対する締め付けは、度を越えたものとなっている。それは単に締め付けと言うよりは、完全な破壊と言うべき性質のものであり、政権の上層部にも及んでいた様である。しかし、こうした攻撃よりも、四川及び四川の者に対する攻撃が優先されている。

(四) 四川放棄から壊滅迄

四川全域を破壊した張献忠は四川を離れ、陝西に向か

った。その時の様子をマガリャンエスは、次の様に記している。

「一六四六年九月十二日に、都市の城壁を破壊したまま、この暴君は陝西 Xên Si 省に向けて出発した。国王が造った村や町や都市道には、人もなく食糧もなかった。というのは、暴君は凡てを殺し、破壊したからである。彼は幾つもの山々を通る道を造った。省を全域に亘って破壊しはしたが、その住民たちや彼らの財産には彼は意図的に手を付けなかった。今ここで彼らを殺すために、そして通過する軍隊のための食糧を調達するために、とっておいたのである。先へ続く道がなかったため、そのうえ、山が険しくしかも道が入り組んでいたため、彼は毎日ひとりづつ現地の者を捕えた。そして、生命は救けてやると約束した。その者は軍隊を導き、その挙句狡猾な暴君は彼の奉仕に対して首を斬ることで報いた。そこには一片の慈悲すらなかった。それに関連して、現地の人々は、次の様に書いている。猛禽といえども夜に雛鳥の熱気を利用したら、朝にはその雛鳥を放す。その辺りでは昼は雛鳥を襲うことはしない、と。毎日二レグアから三レグア、山や谷の道のない所を進んだ。その苛酷さのために多くの馬が死んだ程であり、彼

はその持ち主の首も斬るか、少なくとも二百回の鞭打ちを科すかした。少し離れて手荷物の上に、募集した兵士の一隊が続き、その後には女たちや幼い歳端の行かぬ子供たち、或いは病人たちや疲労した者たちが従った。即ち、狭い場所で馬に踏み付けられ、押し潰されたので、彼らは軍隊に追い付くことができなかつた。しかも追い付くや否や、彼らが逃亡したがっているという名目で、暴君は彼らを生きたままま皮剥ぎにしたり寸断したりすることを命じた。<sup>(69)</sup>」

一六四六年九月十二日は順治三年八月四日にあたる。ここでは移動の様子が記されている。行軍には婦女子も含まれていた様であるが、理由を付けては殺されている。「歐陽氏遺書」には、「丙戌（一六四六年）……秋八月、張献忠は成都を棄て、北へ去った。途中、順慶の境界で大閲兵を行ない、四川の兵を殺戮し尽くし、ひとりたりとも残さなかつた。」と記されている。この場合の「北」は、陝西を指すものと思われる。行軍途中の虐殺については『蜀記』にも記されているが、『蜀記』では、成都を離れたのは、順治三年九月十五日の事とされている。

張献忠の行動に対して抵抗がなかつたわけではない。

マガリャンエスは、この直後の大規模な二件の抵抗を伝えてゐる。

「暴君はこの場所に留まった。それは新兵ばかりであり、しかも武装状態の悪い三千乃至四千人の兵士を持っていたであろうと思われるひとりの將軍と、争いをするのが狙いであつた。その將軍は、危機を脱するためこの軍勢を集めたこの土地の者であつた。暴君は途中で彼らを捕えようと企てた。そういうわけで、彼は大いに馬を跳ばして出発した。それはその將軍の先を越すためであり、彼らを分断するためであつた。しかし、そうしようとして着いた時には、自分に従うことができたのは僅かに二人の兵士しかいないことが判つた。四川 *Sú chuen* から来た者たちは逃げるための時間を持っており、人々から集めてきた銀と牛をその將軍に渡した。暴君が自分の幕営に戻るや、彼から逃げた者たちに対して彼が行なつた破壊の企ては、今度は部下たちに向かつた。彼らについて、その日彼は、將軍たちに占有された家に残つていた四百人を皮剥ぎにした。何の弁解も彼には役に立たなかつた。人数が非常に多かつたので、身体全体の皮を剥ぐことは彼にはできず、単に背中の皮だけを彼は剥いだ。死刑執行人は連続的にかくも巧みに短時間で、まる

で首を斬るかの様にそれを行なつていった。こうして皮を剥がれ、衣服を脱がされ、自らの血をまとつた者たちを、人気のないある場所に横たえることを彼は命じた。この哀れな人々にとっては、寒さと苦痛だけでも、死ぬよりも大きな辛苦であつた。<sup>(70)</sup>」

もうひとつのは重慶の抵抗であり、それは次の様なものである。

「この暴君が省都を取つた始めのうちは、全省が彼に服従した。しかし、その後、既にわれわれが述べた様に、徐々に人々や諸都市は彼に反抗していった。この暴君がその省全域に亘る破壊の中で、彼自身の地区と共に破壊しなかつた重慶府 *Cidade de Chuán Kín* がそうであつた。兵隊の食糧を獲得するために、途中でそれを行なうために残しておいたのであつた。もし、ここに来る迄に途中通過して行軍して来た山中の住民に対して彼が行なつた様に、事前にそこを破壊してしまつていたら、それは確保できなかつたであろう。三日間に亘り、彼の息子たちと將軍たちによって攻撃が行なわれた後に、この暴君は十月十七日にこの省の四番目のこの都市に入つた。三日目に国王が更に強力な軍隊と共にその都市に着いたのを見て、彼は凡ての場所に火を放つた。この様な

行為により、食糧やその他の財産を含む凡ての物が、三時間のうちに焼けてしまった。火を見て兵隊は城壁に登り始め、火を逃れて来た人々を殺した。死んだ者は全部で六千乃至七千人に上ったであろう。その中にいて死を免れた者はひとりもいなかった。<sup>(71)</sup>」

食糧調達のために破壊しなかった重慶の抵抗の主体が、如何なるものであったのかは、具体的には判らない。成都から陝西へ向かって行ったにも拘らず、この時点で重慶に進軍しているのは不自然である。これ迄の例では、陝西へ出るためには漢中を攻略する必要があると考えられていたことから、張献忠は漢中を占拠し得なかった可能性が強い。実際、張献忠自身は陝西に出ることなく、西充県において清軍に射殺されている。順治四年（一六四七年）正月の票簽檔（内閣が皇帝に代わって準備した、臣下からの上奏に対する裁決の方法や原案を記したもの）には、次の様に記されている。

「靖遠大將軍和碩肅親王豪格は貝勒、貝子、公及び内外の群臣を率いて、次の様に上奏した。われわれは兵を率いて十一月七日に漢中を出発し、二十六日に南部に着いた。生け捕りにした賊を尋問したところ、張献忠たちは目下、西充県境にいる、と言った。命令によって牛録

〔「ニル」毎に軍備を整えて援護し、八旗護軍岳尼大章京鄂博巴図魯、蒙古固山額真準塔巴図魯等に兵を率いて先発させ、臣は満州、蒙古の驍騎を統率して昼夜兼行で急ぎ進んだ。次の日の明け方に西充に着くと、張献忠自らが騎兵や歩兵を率いて營を出て迎撃した。大章京鄂博巴図魯、蒙古固山額真準塔巴図魯及び前鋒八旗護軍は奮戦して、大いにこれを敗り、張献忠を陣で射殺した。臣も継いで直ちに到着し、軍を分けて指揮して、賊の兵營百三十六カ所を敗り、馬一万二千二百三十九匹を得た。<sup>(72)</sup>」

これと同内容の記事は、『清世祖実録』巻二十九にも見ることができ<sup>(73)</sup>。マガリャンエスの報告書には、張献忠の死のみを取り上げた記事はない。僅かに、一六四七年一月三日に清軍に射殺されたことが記されているだけである。<sup>(74)</sup>これは順治三年十一月二十八日にあたるので、順治三年十一月二十七日とする清側の記録とかなり近い。マガリャンエスは張献忠の最期迄は確認し得なかったために、この様な異同が生じたのであろう。ブリオとマガリャンエスは移動途中に清軍に捕えられて、北京に送られている。こうして彼らの四川における布教活動は終ることになる。



\* \* \*

マガリャンエスの報告書は、張献忠による四川支配についてのまさに同時代史料であり、内容も極めて詳細なものであるが、その反面、記事内容には或る種の限界があると言わなければならない。というのは、ブリオとマガリャンエスの二人は余りにも張献忠に近付き過ぎたために、張献忠の周囲の状況については把握し得ても、隔絶した他地域の状況については十分に理解していたとは言い難いからである。張献忠の軍隊が他の地方に侵攻した際に戦った相手が如何なるものであり、張献忠に敵対した勢力がどの様な構造を持っていたのか、ということ等が記されていないことによっても、それは判る。

『欧陽氏遺書』を始めとする中国側の史料には散見されるが、マガリャンエスの報告書には見ることできないものに、揺黄賊の存在がある。揺黄賊については『明季南略』卷十「張献忠乱蜀本末」に、「揺黄は原名は姚黄で、もとは漢中の土賊の姚と黄の二姓の者が首であったことによる。後に、その衆が多くなり、十三に分かれ、訛って揺黄となり、袁韜を首とし、衆十方を擁した。その他の、呼九思、王昌、陳林、景果勤、王友進、王興、楊正管等の如きは、各々数万人を従え、四川北部の保寧

や順慶の一带を悉く破壊した。」とある。一方、『荒書』には、「賊首の最も著しい者を揺天動と言ひ、黄龍と言ふ。四川ではこれを揺黄の賊と呼んでゐる。」とある。しかし、清朝の檔案には、揺黄賊は姚黄賊とも記されているので、『明季南略』の方が正しいのかもしれない。

『欧陽氏遺書』には、「甲戌(一六三四年)、一斗粟、中斗星、過天星等は巴山を占拠し、揺黄賊、奪世王、争天王、争食王、行十萬、馬朝、許仁貴等の十三家は巴州、通江、東郷、太平、新寧、開県を破り、その住民を皆殺しにした。」とあり、張献忠を中心とする勢力が四川に移動を始めた頃には、既に活動していたことが記されている。同書には、「辛巳(一六四一年)、……広安の白蓮教徒の何加起は、老仏と称して数万人を集めたが、失敗したので揺黄賊に投じた。」とあり、白蓮教徒の乱が揺黄賊に吸収されたことを示唆している。更に、同書には、「甲申(一六四四年)、……揺黄賊は新寧や梁山から鄰大に返り、四川の地は大いに動揺した。」「乙酉(一六四五年)、……揺黄賊は巴州、通江、東郷、太平、達州、梁山、新寧、開県の各地方の人々を皆殺しにしたので、人家が全く無くなってしまった。」「丙戌(一六四六年)、……揺黄賊、行十萬、争天王、奪天王、争食王、馬朝は

共に大營に移り、広安州の河東に集まった。」とあり、張獻忠を中心とする勢力が四川に侵攻してからも、依然として揺黄賊は四川東部及び北部を中心に活動していたことが判る。

順治五年（一六四八年）閏四月二十八日の署巡撫四川等處提督軍務都察院右檢都御史李國英の題稿（公人としての上奏文である題本の下書）には、「揺黄、曾天亡（争天王と同じ。）、邢十萬、馬超等の賊は今、福垣、龍居院等の處に駐屯し、兵營を三十里以上連ねた。夜に哨兵を放ち、郷民の内若い者を連れて来て兵營に加え、老弱婦女は殺害したが、災いの元凶はともに遂寧へ去った。」と記されている。

揺黄賊はこの後も長期間にわたって勢力を振るったが、順治十三年（一六五六年）五月の欽差提督軍務兼撫治鄖陽等處地方都察院右檢都御史胡全才の掲帖には、「寧南靖寇大將軍臣阿は姚黄等の賊を殺害し、賊の兵舎一万間余りを焼き、鎧兜五千余組を灰にし、偽総副參游等の下士官合わせて五十二員、兵民男女一万千三百五十名を招撫し、その帰順しない賊が放棄した、拉致された屈しない善人の男女五百五十二名、馬、驢馬、牛合わせて百七十四匹は、縁により私の許に届けられた。」<sup>(76)</sup>とあり、清

軍が揺黄賊を鎮圧したことが記されている。

勿論、張獻忠亡き後も、その残存勢力は四川において活動を続けている。賀珍が漢中において、再び清朝に対する抵抗活動を開始したこともあり、四川は長期間に渉る混乱状態に陥っていた。清朝の四川全土の掌握はかなり遅く、混乱が終結したと見做すことができるのは、康熙年間になってからのことである。<sup>(78)</sup>

マガリャンエスの報告書にはその後の四川の状況を示す次の様な記事がある。

「一年後、われわれがタタール人と共に戻って来た時、その省の多くの地域を歩いてみたところ、そこがかつて人が住んでいた土地ではなく、既に野性の森林であり、人間というより虎やその他の猛獣の棲み家である様にわれわれには思えた。たとえば、山頂や山の洞窟に誰かが逃れたとしても、彼らは飢えと連続的に襲われる恐怖により、地中から掘り出された身体の持ち主の様であるうと思われる。」<sup>(79)</sup>

四川で虎が発生したというのは単なる比喩ではなく、実際に異常発生したらしい。『歐陽氏遺書』にも、虎が異常発生したことが記されている。更に、『歐陽氏遺書』には、「大体、四川の人で賊によって死んだのは十分の八

であり、飢えによって死んだのは十分の二であった。僅かに生き延びた人もまた虎に食べられ、四川の人で生き延びたのは殆どいなかった。」とあり、四川が壊滅状態になっていたことを示している。順治七年(一六五〇年)

三月二十四日の四川巡按張璿の掲帖にも、「順慶府附郭の南充県知県黄夢卜の上申によると、南充県の元來報告されている招來の戸口人丁の五百六名の内、虎に喰われたのは二百二十八名、病死したのは五十五名、現在生存しているのは二百二十三名であり、新たに招いた人丁の七十四名の内、虎に喰われたのは四十二名、生存しているのは三十二名である。」と記されている。四川全域がこの様な状態であったと断言はできないが、張献忠を中心とする勢力や揺黄賊による破壊、更には明の残存勢力や、勢力範囲を拡大してきた清軍とこうした勢力との抗争により、広範囲に亘って殆ど壊滅状態となったことは確かであろう。

#### 四 結 び

以上、マガリャンエスの報告書を中心として、『歐陽氏遺書』を始めとする中国側史料と比較検討していくことにより、張献忠の四川支配の経緯について考察を進めて

きた。これによって、マガリャンエスの報告書の信憑性が極めて高いことを確認できた。『歐陽氏遺書』を始めとする中国側史料の幾つかについても、その史料価値がある程度判明したのではないかと思われる。

張献忠の四川支配についての史料系統の明らかな同時代史料であるマガリャンエスの報告書は、事実経過の記述において極めて正確である。特に、日時の正確さは中国側の野史の及ぶところではない。清朝の檔案によっても、一部は確認することができる。マガリャンエスが報告書を作成する以前に、予め覚え書きの様なものを作成していたことも考えられるが、詳しくは判らない。

中国側の野史では、『歐陽氏遺書』は、事実経過に関しては断片的な面もあるとはいえ、かなり正確である。『紀事略』は、日時の記載に若干の誤りはあるものの、信憑性は比較的高いと言える。『蜀記』は、日時は殆ど誤りであるうえ、事実経過の記述についても誤りが多い。しかし、中には『歐陽氏遺書』以上に詳細に記されている部分があり、それがマガリャンエスの報告書と、奇妙に一致することがある。『蜀記』については、著者名も伝わっておらず、史料系統も殆ど判らないが、張献忠に近い位置にいた者が著した可能性が強い。後になって記憶

や伝聞を基に纏めたために、事実経過の記述に関して様々な錯誤が生じたのであろう。一方、『紀事略』は、歐陽直と同様の立場にいた者が著したのではないかと思われる。

教会史料を中心にして、こうした中国側史料と比較検討していくことにより判明した張献忠の四川支配の経緯を以下において簡単に纏めてみることにする。

張献忠を中心とする勢力は四川に侵攻した後、順治元年八月十五日（一六四四年九月十五日）に成都において大西政権を樹立した。大西政権は、当初より張献忠に従っていた者たち以外に、明朝の残存勢力をも吸収し、明朝の官制に擬した官僚組織を有するに至った。布教のため四川に来ていたルイス・ブリオとガブリエル・デ・マカリャンエスの二人のイエズス会士も、張献忠の傘下に入った。この後、暫らくの間は小康状態が続いたが、やがてそれも破綻し始める。張献忠はかねてより四川を離れることを考えていたが、陝西に移動するためには、軍事的に重要な拠点となる漢中を占拠することが必要であった。順治二年（一六四五年）には、少なくとも二度に亘って漢中攻略を試みたが、当時漢中を占拠していた清軍にその度に敗北を喫した。これを契機に張献忠が行な

った政権内部に対する締め付けの強化は、非常に強い抵抗を招き、四川各地で張献忠に対する反乱が勃発するに至った。こうした反乱は、元来残虐性があったと思われる張献忠の行動に拍車を掛ける結果となり、政権の上層部の多くの者たちが張献忠によって殺害された。大西政権は、張献忠による政権内部の締め付けの強化と、それが誘発した反乱によって、内部崩壊していったのである。順治三年八月四日（一六四六年九月十二日）には、張献忠を中心とする反乱勢力は四川を放棄し陝西に向かうため、成都を離れた。しかし、張献忠は陝西に出ることなく、この直後に西充県において清軍に殺された。中国全土だけでなく周辺諸国をも征服しようという、誇大妄想的な野望とは裏腹に、張献忠は四川支配にすら失敗してしまっただけである。

従来、張献忠を中心とする反乱勢力による全面的な四川破壊、即ち、いわゆる「屠蜀」が、事実を反映しているか否かが議論されてきたが、本稿における考察によつて、これがかかなりの規模で行なわれたことは事実であることが確認された。これはその性質から、概ね三種類に分類することが可能である。まず第一は、重慶や成都を始めとする四川侵攻時の破壊である。これは張献忠を中

心とする勢力の場合にのみ見られることではないと思われるので、必ずしも「屠蜀」とは言えないかもしれない。第二は、大西政権内部の反乱に対する鎮圧である。

主なものとしては重慶の反乱があり、こうした反乱の鎮圧に対しては皆殺しの処置が取られている。反乱を契機としてはいないが、陝西に侵攻する直前の成都における虐殺や、成都大慈寺における生員の虐殺も、抵抗を未然に防ぐという意味があったと考えると、同じ範疇に入ることが可能であるものと思われる。尚、こうした個々の虐殺の規模は、ある程度迄は把握することが可能である。第三は、四川を離れて陝西に向かった際の組織的な虐殺である。これにより四川が壊滅状態になったであろうことは想像に難くないが、破壊の規模は具体的には判らない。第一、第二の破壊は時間的にも明確に区分できる。しかし、第二、第三の破壊は、成都を離れてからは同時進行のものとなる。第三の破壊が主として四川の者に向けられたことは、マガリャンエスも記しているが、その理由については何ら触れられてはいない。或いは、マガリャンエス自身にも理解し得なかった事であったのかも知れない。こうした破壊が可能となった背景には、大西政権の成立当初は張献忠はかなりの支持を得ていた

こと、このため統治機構が整備されたこと、等がある。「閻老」や養子となった四人の將軍たちの様に、終始張献忠の手足となって活動していた者たちの存在も、看過できない。

張献忠を中心とする反乱勢力の構成については、マガリャンエスの報告書では、張献忠が最終的に四川を離れようとした際の記述から、僅かに窺うことができる。四川の者を少人数になるまで殺した後、僅かな人数で四川を離れようとした様に、中国側の史料に多く見られる様な、いわゆる「流賊」もしくは「流寇」的な性格もあると言える反面、実際に四川から移動する際には、最終的には殺戮されてしまうにせよ、当初は婦人や子供も行軍に含まれていた様に、移動が容易な社会集団とは思えない点もある。これは農民もしくは民衆が「流賊」化もしくは「流寇」化したと言うことでは、説明し難いのではないかと思われる。集団の指導者である張献忠と、集団の他の構成員との出身階層が異なることも考えられなくはないが、これも現時点においては推測の域を出ない。尚、揺黄賊については、張献忠を中心とする反乱勢力との直接の接触が少なかったためか、マガリャンエスの報告書には全く見られない。揺黄賊は、対峙している

他の諸勢力の動向とは無関係に、破壊活動を行なっており、いわゆる土賊とは考え難いうえ、都市の無頼と規定するには規模が余りにも大き過ぎる。揺黄賊を始めとする四川の諸勢力と、張献忠を中心とする反乱勢力との構造的差異については、更に検討が必要であろう。

註

(1) 郭沫若「甲申三百年祭」は、一九四四年三月に『新華日報』に連載され、同年、北京・新華書店から単行本として刊行された。後に、『歴史人物』（北京・人民文学出版社、一九四七年）に収録された。『沫若文集』第一二卷（北京・人民文学出版社、一九五九年）、『郭沫若全集』歴史編・第四卷（北京・人民文学出版社、一九八二年）にも、収録されている。『沫若文集』を底本にした、郭沫若選集刊行委員会編『郭沫若選集』一五・歴史人物（雄渾社、一九八三年）には、牧田英二氏による邦訳が収録されており、牧田氏による同書の「解題」には、「甲申三百年祭」のその後の評価についても詳述されている。この他に、いわゆる明末の農民反乱に関する研究としては、古くは、李文治『晚明民変』（北京・中華書局、一九四八年）がある。これは書名を『晚明流寇』として、一九八三年に台北・食貨出版社から再刊されているが、本文も「民変」を「流寇」に置き換えただけで、内容の

教会史料を通してみた張献忠の四川支配

変更はない。他方、上海において、一九八九年に上海書店と中華書局の連合で、書名を『晚明民変』としたまま、再刊されている。この他の中国や台湾における研究の主なものとしては、次の様なものがある。李光濤『明季流寇始末』（台北・中央研究院歴史語言研究所、一九六五年）。柳義南『李自成紀年附考』（北京・中華書局、一九八三年）。顧誠『明末農民戦争史』（北京・中国社会科学出版社、一九八四年）。王綱『明末農民軍名号攷録』（成都・四川省社会科学出版社、一九八四年）。郝宇逸主編『李自成殉難于湖北通山史証』（武漢・武漢大学出版社、一九八七年）。袁良義『明末農民戦争』（北京・中華書局、一九八七年）。この他に、北京陥落後の南明に関する研究に、謝国楨『南明史略』（上海・上海人民出版社、一九五七年）がある。

(2) 日本における主な研究としては、次の様なものを挙げることができる。清水泰次「明代の流民と流賊」（『史学雑誌』四六卷二号・四六卷三号、一九四四年）。古林森弘「明末の農民反乱——李自成集団とその展開——」（『兵庫県社会科研究会会誌』三号、一九五五年）、同「明末の農民反乱と読書人層——とくに李自成集団を中心にして——」（『兵庫県歴史学会会誌』二号、一九五六年）。田中正俊「民変・抗租奴変」（『世界の歴史』一一〔筑摩書房、一九六一年〕所収）。谷口規矩雄「明代の農民反乱」（『岩波講座世界歴史』一二卷〔岩波書店、一九七一年〕所収）。

- 鈴木中正『中国史における革命と宗教』（東京大学出版会、一九七四年）。谷口規矩雄「明末農民反乱試論」〔『大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）』二八号、一九八〇年〕。吉尾寛「李自成台頭以前の明末の華北農民反乱」〔『史林』六三卷五号、一九八〇年〕、同「明末における流賊の『奸細』について」〔『名古屋大学東洋史研究報告』八号、一九八一年〕。山根幸夫「明末農民反乱と紳士層の対応」〔『中嶋敏先生古稀記念論集』下「汲古書院、一九八一年」所収〕。谷口規矩雄訳註「李自成・張献忠の乱」〔谷川道雄・森正夫編『中国民衆反乱史』三・明末・清Ⅰ〔平凡社、一九八二年〕所収〕。佐藤文俊『明末農民反乱の研究』（研文出版、一九八五年）。尚、佐藤氏の著作には「明末の農民反乱に関する研究動向」が収録されており、中国と日本における研究動向が詳しく紹介されている。研究文献目録としては、山根幸夫編『中国農民起義文献目録』（東京女子大学東洋史研究室、一九七六年）がある。
- (3) 張献忠を中心とする反乱勢力を積極的に評価したのは、謝国楨「農民起義与張献忠」〔『歴史教学』一九五二年第二期。後に、存萃学社編『歴代農民起義研究論叢』隋・明、中冊〔香港・大東圖書公司、一九七八年〕に再録〕が、最初であろうと思われる。張献忠を中心とする反乱勢力に関しては、註(1)に挙げたものにも触れたものはあるが、専著としては次の様なものがある。北京汽
- 車製造廠工人理論組『張献忠伝註釈』（北京・中華書局、一九七七年）。胡昭曦『張献忠屠蜀辯——兼析湖広填四川』（成都・四川人民出版社、一九八〇年）。袁庭棟『張献忠伝論』（成都・四川人民出版社、一九八一年）。『社会科学研究叢刊』編輯部編『張献忠在四川』（成都・四川省新華書店、一九八一年）。王綱『張献忠大西軍史』（長沙・湖南人民出版社、一九八七年）。
- (4) 孫次舟「張献忠在蜀事蹟考察」、楊濟坤「張献忠屠蜀還是明清統治階級」〔前掲『張献忠在四川』所収〕。「屠蜀」の責任は清軍にもその一端があった、というものも含めると、註(3)で挙げたものの殆ど全てがそれにあたり、孫達人「張献忠「屠蜀」的真相——試論大西政權失敗的原因」〔前掲『張献忠在四川』所収〕の様に、張献忠による「屠蜀」を基本的に事実であると認める見解の方が、むしろ希である。
- (5) 今湊良信「張献忠の四川支配をめぐる研究動向」〔『近代中国』一三三号、一九八三年〕。今湊氏は、今日においては主流とも言える清軍糊塗説には批判的な様である。しかし、問題点の指摘のみに止まってしまっている。
- (6) 鈴木中正「張献忠の四川支配」〔前掲『中国史における革命と宗教』所収〕。鈴木氏が張献忠による「屠蜀」が史実を反映していると考えられている背景には、氏自身の研究がある様に思われる。即ち、「四川・陝西・湖北三省交界地方への人口集中と移住民の社会環境」〔『清朝中

期史研究『愛知大学国際問題研究所、一九五二年。後に、一九七一年に燎原から再刊。』所収。)において、清初の四川への人口流入を述べておられるが、その前提として張献忠による虐殺が、四川において人口の減少を引き起こしたものと考えておられるのである。しかし、これは虐殺を行なったのは張献忠に特定できない、とする反論に対しては、説得力を持ち得ないであろう。

(7) 山根幸夫「大西政権と紳士層の対応」(小野和子編『明清時代の政治と社会』(京都大学人文科学研究所、一九八三年)所収。)

(8) 任乃強「関于張献忠史料の鑑別」(前掲『張献忠在四川』所収。)等においても、関係史料の個々の史料価値について論じられているが、史料の相互関係という点になると曖昧な点が多い。

(9) 『蜀碧』には邦訳がある。松枝茂夫訳『蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記』(平凡社、一九六五年)。しかし、松枝氏も、『蜀碧』に対しては、文学的価値しか認めておらず、史料として扱うことは難しいと考えておられる。

(10) 徐宗澤「張献忠入川与耶穌会士」(『東方雜誌』四三卷一三期、一九三六年。後に、存萃学社編『明末農民起義研究論叢』(香港・大東圖書公司、一九七七年)に再録。)という、本稿と同様の視点からこの問題について取り上げた短い論文があることを予め断っておきたい。しかし、これには教会史料は勿論のこと、中国側の史料につ

教会史料を通してみた張献忠の四川支配

いても根本史料と呼べるものは殆ど扱われておらず、史料面でかなりの制約がある。

(11) James Bunyan Parsons, *Peasant Rebellions of the Late Ming Dynasty*, University of Arizona Press, 1970. —, *The Culmination of a Chinese Peasant Rebellion—Chang Hieng-chung in Szechwan, 1644-46*, *Journal of Asian Studies* 16-3, 1957. ハーンズ氏は教会史料としては、ローマ・イエズス会文書館所蔵 Thomas Ignatius Dunin Szpot, *Collectanea Historiae Sinensis 1641 ad 1707*. を引用されている。氏は明記されていないが、これは Jap. Sin. 104, 105. を指している。尚、スポットが見た原文書とされている *Relação das tyrannias obradas por Changhien Chungo, famoso ladrão da China em o anno de 1651*. は刊本名であり、この点は誤りである。

(12) Carlos Sommerförgel, *Bibliothèque de la Compagnie de Jesus*, 12 vols, Paris, 1960. Robert Streit, *Bibliotheca Missionum*, vol. 4, 7, Achen, 1928, 32.

(13) Martinus Martini, *De bello Tartarico historia*, Romae, 1654. これに関しては、石田幹之助『欧人の支那研究』(共立社、一九三六年)に詳しく記されている。尚、近年中国語訳がなされたが、『清代西人見聞録』(北京・中国人民大学出版社、一九八五年)所収。これはラテン語版からではなく、英語版からの重訳である。



- (14) Adrian Greslon, *Histoire de la Chine sous la domination des Tartares*, Paris, 1671. (矢沢利彦訳『東西曆法の対決——清朝初期中國史』[平河出版社、一九八六年])。
- (15) Biblioteca da Ajuda, *Jesuitas na Asia*, 49-V-14, ff. 376-436. *Historica Relatio eorum quae contigerunt occasione concertationis Calendarii Sinici facta a R. P. Joanne Adamo Schall, Societatis Iesu sacerdote, anno Christi 1658.* じやんせんにんす語の次訳本が『』。Edités par le P. Henri Bernard, *Lettres et Mémoires d'Adam Schall S. J. Tientsin*, 1942.
- (16) Daniello Bartoli, *Dell' historia della Compagnia di Gesu, La China*, Romae, 1663.
- (17) *Jesuitas an Asia*, 49-V-13, ff. 229-256. ff. 303-347.
- (18) Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap. Sin. 127, ff. 1-35. *Relação da perda e destruição da Provincia e Christandade de Su chuen, e do que os Padres Luis Bulhio, e Gabriel de Magalhães passaram em seu captivero.*
- (19) George H. Dunne, S.J., *Generation of Giants—The Story of the Jesuits in China in the Last Decades of the Ming Dynasty*. University of Notre Dame Press, 1962.
- (20) 『聖教入川記』は、一九八一年に成都・四川人民出版社から刊行された。尚、この原本は四川省図書館に所蔵されている。
- (21) 『聖教入川記』(成都・四川人民出版社、一九八一年) 巻頭。
- (22) 『聖教入川記』(成都・四川人民出版社、一九八一年) 六二頁。「出版説明」では触れられていないが、本文中の註釈は全て原本にも見られる。恐らく、前半部の本文はグールドンによる翻訳であると考えられるが、註釈はその際に彼が記したのであろう。
- (23) 『安先生行述』は、既に矢沢利彦氏により、パリ・フランス国立図書館に所蔵されていることが、紹介されている。矢沢利彦「中国カトリック史研究のために」(『上智史学』一三、一九六八年。後に、「文献解題」として、榎一雄編『西欧文明と東アジア』[平凡社、一九七一年]に再録)。矢沢氏から筆写したもののゼロックス・コピーを頂いたが、それによると、その原本は僅か二葉の極めて簡略な刊本である。恐らく、墓誌の様なものではなかったかと思われる。
- (24) 任、前掲論文。
- (25) 謝国楨『晚明史籍考』(北京・北平図書館、一九三二年)。後に、一九六四年に上海中華書局上海編輯所から増補改訂版が刊行されている。
- (26) 山根、前掲「大西政権と紳士層の対応」。

(27) 『欧陽氏遺書』は、『澠滙叢』と共に刊行されているが、『澠滙叢』よりも短く内容も簡略であることからか、その付巻とされている。しかし、資料価値という点では『欧陽氏遺書』の方が遙かに高い。全四冊で、第四冊が付巻とされているが、この付巻が『欧陽氏遺書』である。日本では東洋文庫に所蔵されている。

(28) 侵入回数については必ずしも見解が一致しているわけではなく、諸説がある。『蜀碧』には、張獻忠は三回四回に侵攻していると記されている。最も多く数えているのは王綱氏で、前掲書において五回とされている。

(29) *Jesuitas na Asia*, 49-V-12, ff. 511-511v.

(30) *Jap. Sin.* 127, ff. 1-1v.

(31) *Jap. Sin.* 127, f. 1v.

(32) 劉宇亮については、『明史』卷二五三に伝がある。それによると、彼は綿竹県の出身で、万曆四十七年（一六一九年）に進士となり、崇禎十年（一六三七年）八月に礼部尚書兼東閣大学士、翌十一年（一六三八年）六月に文淵閣大学士、十一月には総督になっているが、十二年（一六三九年）二月には弾劾され、罷免されている。その後、出身地に戻った様であるが、没年は記されていない。没年については、仮に地方志に記載されていたとしても信憑性が高いと断言はできないが、乾隆元年（一七三六年）刊の『四川通史』や康熙四十四年（一七〇五年）刊の『綿竹県史』等でも確認し得なかった。

教会史料を通してみた張獻忠の四川支配

(33) *Jap. Sin.* 127, f. 1v.

(34) *Jap. Sin.* 127, f. 2.

(35) *Jap. Sin.* 127, f. 2.

(36) *Jap. Sin.* 127, f. 2v.

(37) *Jap. Sin.* 127, f. 2v.

(38) 孫達人氏は「張獻忠『屠蜀』的真相——試論大西政權失敗的原因」（前掲『張獻忠在四川』所収。）において、中国側の諸史料の比較から政權成立の日時を同日に比定されている。しかし、同様の見解を採る研究者は比較的小さい。

(39) 『五馬先生紀年』は、四川人民出版社の『聖教入川記』に収録されている。これは伝迪吉の自伝であるが、それによると、彼は順治元年（一六四四年）に十八歳となっている。当事者によるという点で史料価値は高いと考えられるが、長期間の記事を含む反面、個々の記事が他の野史と比較して簡略なのが難点である。

(40) これは、乾隆四年（一七三九年）の刊本を補訂したものであるために、比較的古い記事を含んでいるものと考えられる。特に、「勘乱」は、独立した野史の様な内容を持つている。

(41) 顧誠氏の前掲書の巻末には、極めて詳細な偽官（大西政權の官僚）構成表が掲載されている（三九八～四〇五頁）。信憑性の低いものもあれば、出典も明記されており有用である。

- (42) Jap. Sin. 127, f. 11.
- (43) Jap. Sin. 127, f. 3. 当時、成都知県であった呉継善は、『紀事略』には、大西政権の礼部尚書になったとあるが、嘉慶二十年(一八一五年)刊の『成都県志』巻二「政績」によると、この時点で殉難したことになっている。
- (44) Jap. Sin. 127, f. 3v.
- (45) Jap. Sin. 127, f. 5.
- (46) 中国人民大学歴史系・中国第一歴史檔案館合編『清代農民戦争史資料選編』第一冊(北京・中国人民大学出版社、一九八四年)上巻、三三頁。中央研究院歴史語言研究所編『明清史料』甲編(一九三〇年。後に、一九七二年に台北・維新書局から再刊)。第二本、一〇三葉。
- (47) Jap. Sin. 127, ff. 5-5v.
- (48) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、巻頭。
- (49) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、二二四頁。
- (50) Jap. Sin. 127, ff. 10-10v.
- (51) Jap. Sin. 127, f. 11.
- (52) Jap. Sin. 127, f. 11v.
- (53) *Jesuitas na Asia*, 49-V-12, f. 511v.
- (54) Jap. Sin. 127, f. 12.
- (55) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、四七頁。
- (56) Jap. Sin. 127, f. 12v. 通常、秀才が 'Bacharel' と訳かれ、挙人は 'Licenciado' と訳されるが、こゝ言われて
- ている 'Bachareis' (複数形) には「もう試験から解放されている者」、即ち、任官していたと考えられる者もいたことから、ここでは一応、挙人としておく。尚、ヨーロッパ側の文献に見える科挙については、矢沢利彦「西洋文献に見えた明代の科挙制度」(『埼玉大学紀要・社会科学編』六巻、一九五七年)がある。
- (57) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、四六、四七頁。
- (58) Jap. Sin. 127, f. 13v.
- (59) Jap. Sin. 127, ff. 14v-15.
- (60) 既に、鈴木中正氏が前掲書において、『蜀記』のこの記事を紹介されている。
- (61) Jap. Sin. 127, f. 15.
- (62) Jap. Sin. 127, f. 16. 「矢で耳に穴を開けた。」ということが、何を意味するのかわからない。或いは、一種の処刑方法であったのかもしれない。
- (63) Jap. Sin. 127, f. 18.
- (64) Jap. Sin. 127, f. 19.
- (65) Jap. Sin. 127, f. 19v.
- (66) Jap. Sin. 127, f. 19v.
- (67) Jap. Sin. 127, f. 20v.
- (68) Jap. Sin. 127, f. 20v.
- (69) Jap. Sin. 127, f. 21.
- (70) Jap. Sin. 127, f. 21v.

(71) Jap. Sin. 127, f. 22. 重慶は、註(34)では、「四川の二番目の都市」とされているが、ここでは四番目の都市ということになっている。その理由として、張献忠がこの直後に西充県で清軍に射殺されていることから、これは重慶ではなく、西充県に近い順慶の誤りである可能性がある様に思われる。

(72) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、二二六頁。

(73) 『大清世祖実録』、順治二年十二月甲申の条。

(74) Jap. Sin. 127, f. 25.

(75) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊下巻、四一七頁。

(76) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊下巻、四六五、四六六頁。

(77) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、五六、九九、一六九頁。

(78) 『清代農民戦争史資料選編』第一冊上巻、三九二頁に、康熙五年(一六六六年)六月一日の四川総督李国英の題稿が収録されている。それには清朝が四川を掌握した経過が簡略に記されている。この事から、清朝が四川を掌握したのはほぼこの時期であることが推測される。

(79) Jap. Sin. 127, f. 15.

(80) 『明清史料』甲編、第六本五一九葉。この史料は、既に鈴木中正氏が、前掲書において紹介されている。尚、鈴木氏はこれを丙編とされているが、甲編の誤りである。

[付記]

本稿作成にあたり、指導教授である高瀬弘一郎先生を始め、山本英史、柳田利夫両先生からも御指導を賜りました。末筆ながら、記して謝意を表わさせていただきます。